

大学生における「居場所」と精神的健康に関する一研究

－居場所の心理的機能の観点から－

Study about “ibasho” and mental health of university students

－In terms of psychological function of “ibasho”－

文学研究科教育学専攻臨床心理学専修博士前期課程修了

中 村 聡 市 郎

Souchirou Nakamura

I. 問題と目的

教育現場における不登校問題から端を発した概念に「居場所」という概念がある。「居場所」概念に関しては心理学領域ではいまだ確定した定義はなされていない。「居場所」と精神的健康の関係性については、「居場所」の存在が「抑うつ感」と関係するという研究¹（田島、2000）や「居場所がない感覚」が「アイデンティティの拡散」と関係するという研究²（堤、2002）などが見られ、様々な研究が端緒についた段階である。

様々な「居場所」に関する概念がある中で、杉本・庄司³（2006）は「居場所」の心理的機能という概念を提唱した。この概念は、6因子構造の尺度で測定する事ができ「居場所」を多角的に捉える事ができるという点や、精神的健康との関連が強く予測される心理的要因を含んでいるという点で、「居場所」と精神的健康の関係性を考える上で、非常に有用で、考慮すべき概念と考えられる。人々に対して「居場所」という観点からの援助を考える際には、「居場所」の特徴を多角的に把握する事や、「居場所」と精神的健康の関係性を実証的研究で示しておく事が求められる。従って、本研究においてはこの要求に適う杉本・庄司⁴（2006）の「居場所」の心理的機能尺度を用い「居場所」の特徴を把握することに加え、精神的健康を表す尺度との関係性を統計的に見ることで、「居場所」と精神的健康の関係性に関する基礎的なデータを提示する。本研究における精神的健康の指標として、田島⁵（2000）、堤⁶（2002）を参考に、「抑うつ感」と「アイデンティティ確立」を採用する。

本研究においては、研究の基礎的なデータを提示する目的に加え、実際に「居場所」という観点からの援助を行う際の示唆を与える事も目的とする。従って、調査対象者は、小中高生よりも“孤立や精神的健康が低まるリスクが高い”大学生に定め彼らの「居場所」の特徴を把握する。以上本研究の主眼は、①「居場所」の心理的機能尺度得点と「抑うつ感」「アイデンティティ」尺度間の関係性を探る、②各居場所特有の心理的機能について探る、③「居場所」がないと回答した被調査者が「居場所」であって欲しいと望

む場所の特徴を探るにおかれる。②の各居場所の分類に関しては、杉本・庄司⁷（2006）を参考に、「自分1人の居場所」「家族という居場所」「家族以外の人という居場所」の3分類を本研究では採用する。

II. 予備調査

1. 目的

予備調査では、杉本・庄司⁸（2006）が作成した「居場所」の心理的機能に関する尺度を大学生を対象に実施し、その因子構造に先行研究と異同があるかどうかを確認、検討する。

杉本・庄司⁹（2006）の尺度は、小・中・高生のデータから作成されたものである。したがって、大学生を被調査者とした本調査を実施する前に、大学生における「居場所」の心理的機能の構造を明らかにし、大学生に実施するためにより適切な尺度を構成するというのが、予備調査の第一の目的である。

第二の目的としては大学生版「居場所」の心理機能尺度の妥当性を検証することがある。先行研究における「居場所」の心理的機能尺度に関しては、クロンバックの α 係数を算出することにより、その内的整合性や信頼性については検討されているが、妥当性という側面からの検討はなされていない。そこで、本研究においてはこの予備調査の段階で、大学生版「居場所」の心理的機能尺度の妥当性を、基準関連妥当性を算出するという形で検討する。本研究においては、「居場所」の心理的機能との関連が予測される外部基準として、中島・倉田¹⁰（2004）、忠井・本間¹¹（2006）の文献を参考に、“安心感”と“自尊心”を測定する心理尺度を使用することとする。具体的には“安心感”に関わる心理尺度として、清水・今栄¹²（1981）のSTAI日本語版の状態不安尺度を用いる。また“自尊心”を測定する心理尺度として、山本・松井・山成¹³（1982）の自尊感情尺度を用いる。

2. 方法

大学生を対象として、「居場所」の心理的機能、“安心感”、“自尊心”の3つに関する尺度を掲載した質問紙調査を実施した。以下、被調査者、調査の実施方法、各質問紙の構成について概説する。

(1) 被調査者

被調査者は私立A大学の学生2年～4年生計183名。回答者の内訳は、男性71名、女性112名。また学年の内訳は、2年生124名、3年生44名、4年生13名、その他2名である。

(2) 調査期日

2007年6月29日～7月17日

(3) 調査方法

講義終了後の時間で受講生にアンケート調査へのご協力をいただいた。実施時間は15分程度で、実

施場所は講義が行われた各教室であった。アンケートに回答していただく前に、調査の内容や趣旨を簡単に説明し、無記名なので回答者が特定されないことや、アンケート調査の内容が講義の成績とは関係ないこと等も併せて説明した。調査への協力は強制ではないことも説明し、受講生に無理矢理ご協力いただくことは極力避けるよう心がけた。

(4) 調査内容

【質問紙の構成】

- ①フェイスシート（学年、年齢、性別、サークルに入っているか否か など）
- ②自己認知する「居場所」に関する質問（「居場所」の有無、具体的な「居場所」など）
- ③杉本・庄司¹⁴（2006）の「居場所」の心理的機能に関する尺度（5件法）
- ④清水・今栄¹⁵（1981）のSTAI日本語版の状態不安尺度（4件法）
- ⑤山本・松井・山成¹⁶（1982）の自尊感情尺度（5件法）

3. 結果

(1) 因子分析

杉本・庄司¹⁷（2006）の「居場所」の心理的機能に関する尺度を大学生において実施し、そのデータを因子分析にかけた結果を示す。統計ソフトはSPSS15.0を用い、主因子法による因子分析を行った。固有値1.0以上の7因子を抽出し、プロマックス回転を行い、因子負荷量が0.4未満の項目を削除して検討した結果、33項目が抽出された。その33項目で再度主因子法プロマックス回転をかけた結果を次頁の【表1】に示す。なお因子負荷量が低く削除された項目は、項目21「自分のものがある」（因子負荷量.383）と項目30「好きなものがある」（因子負荷量.379）の2項目であった。各因子について信頼性を確かめるために、クロンバックの α 係数を算出した結果、第Ⅰ因子 $\alpha = .92$ 、第Ⅱ因子 $\alpha = .87$ 、第Ⅲ因子 $\alpha = .86$ 、第Ⅳ因子 $\alpha = .87$ 、第Ⅴ因子 $\alpha = .84$ 、第Ⅵ因子 $\alpha = .76$ 、第Ⅶ因子 $\alpha = .86$ と軒並み高い値を示し、予備調査における各因子の信頼性は確かめられた。加えて、累積寄与率の値は、7因子合計で72.07（%）と高い値を示しており、7つの共通因子で全体の72.07%までを説明できたという結果が得られた。この点から、本尺度の説明率の高さが示唆された。

先行研究の因子構造との違いについてだが、まず予備調査において抽出された7因子について説明する。第Ⅰ因子は、「悩みを聞いてくれる人がいる」や「自分は大切にされている」などの7項目からなる因子で、先行研究の第Ⅰ因子と全く同様の項目群となった。したがって、その名称も先行研究と同様「被受容感」と命名した。第Ⅱ因子は、「本当の自分でいられる」や「自分らしくいられる」などの5項目からなる因子で、先行研究においては10項目で構成されていた第Ⅱ因子「精神的安定」から分かれてできた因子と考えることができる。先行研究の因子に比べ、“無理をせずその場に自分らしくいられること”という意味合いが前面に押し出された因子となったので、第Ⅱ因子は「自然体」と命名した。第Ⅲ因子は、「物思いにふける」や「自分のことについてよく考える」などの5項目からなる因子で、先行研究における第Ⅳ因子に「寝ることができ

る」という項目が加わった以外は全く同様の項目群となった。したがって、その名称も先行研究と同様「思考・内省」と命名することとした。第IV因子は「自分の好きなようにできる」「自由だ」などの4項目からなる因子で、“誰にも邪魔をされずに自分の好きなように振舞える”という意味合いが強い因子となっている。したがって、第IV因子は「行動の自由」と命名した。第V因子は「人を気にしなくていい」や「他人のペースに合わせなくていい」などの4項目からなる因子で、“他人の目や存在を気にせず自由にいられる”という意味合いが強い因子と考えられるので、第V因子「他者からの自由」と命名した。第VI因子は「自分はいまよくやれる」や「自分の能力を発揮できる」などの4項目からなり、その「居場所」において“自分の能力を発揮しうまくやれるという実感や自信”を表していると考えられたため、第VI因子は「自己肯定感」と命名した。最後の第VII因子は「おもしろい」「楽しい」などの4項目からなる因子で、この因子は“ポジティブで心が弾むような”気持ちを表す意味合いが強いと考えられたので、第VII因子は「高揚感」と命名した。

【表1】 「居場所」の心理的機能因子分析結果（主因子法 プロマックス回転）

質問項目	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	因子 V	因子 VI	因子 VII
I 被受容感 ($\alpha = .92$)							
悩みを聞いてくれる人がいる	.889	.131	.102	.022	-.136	-.024	-.129
自分は大切にされている	.838	-.033	.057	-.020	.156	-.059	.180
自分を本当に理解してくれる人がいる	.807	.230	.020	.007	-.058	.054	-.171
自分はそのメンバーである	.775	-.130	-.058	-.005	-.036	-.038	.106
ひとりじゃない	.712	-.177	-.001	-.043	-.018	.037	.184
人と一緒にいられる	.698	-.205	-.016	-.043	-.076	.027	.206
人のために何かができる	.548	-.034	.085	.152	-.260	.030	.104
II 自然体 ($\alpha = .87$)							
本当の自分でいられる	-.027	.880	-.088	.072	-.067	.038	-.069
自分らしくいられる	-.174	.822	.040	-.169	-.063	.010	.304
素直になれる	-.060	.801	.062	-.078	-.133	.060	.185
無理をしないでいられる	.016	.721	-.061	.111	.113	-.072	-.135
安心する	.088	.541	.051	.134	.094	-.086	.134
III 思考・内省 ($\alpha = .86$)							
物思いにふける	-.034	-.006	.937	-.016	-.030	-.017	.060
自分のことについてよく考える	.150	-.041	.764	.050	-.050	.052	-.026
1日のことについてよく考える	.063	.030	.752	.039	-.051	.114	-.235
ボーっと考え込むことがある	-.054	-.069	.725	.026	.078	-.117	.076
寝ることができる	.051	.160	.533	-.151	.347	-.096	-.091
IV 行動の自由 ($\alpha = .87$)							
自分の好きなようにできる	.099	.006	-.001	.894	.038	-.062	-.101
自由だ	-.076	-.002	.004	.761	.029	-.069	.067
自分の好きなことができる	.030	.020	.047	.760	-.050	.121	.048
誰にも邪魔されない	-.053	-.007	.001	.615	.232	-.008	.045
V 他者からの自由 ($\alpha = .84$)							
人を気にしなくていい	-.068	-.056	-.074	.079	.840	.031	.074
他人のペースに合わせなくていい	-.046	-.008	-.045	.045	.838	.082	.015
人に会わなくていい	-.170	-.094	.118	.010	.634	-.071	.036
自分だけの時間が持てる	-.098	.008	.272	.099	.479	.089	.038
VI 自己肯定感 ($\alpha = .76$)							
自分はいまよくやれる	.133	-.019	-.086	.024	.239	.748	-.081
自分の能力を発揮できる	-.126	-.016	.043	.006	-.214	.721	.005
自分に自信が持てる	.159	.080	-.065	-.142	.251	.706	-.026
何かに夢中になれる	-.205	-.049	.209	.111	-.222	.529	.251
VII 高揚感 ($\alpha = .86$)							
おもしろい	.261	.042	-.088	-.062	.085	-.006	.700
楽しい	.171	.262	.021	-.027	-.011	-.062	.664
幸せ	.201	.287	.003	.006	.135	.046	.536
満足する	.005	.248	-.138	.246	-.006	.030	.504
固有値	8.15	6.36	2.69	1.94	1.57	1.34	1
因子寄与率 (%)	25.47	19.88	8.41	6.08	4.91	4.19	3.13

(2) 相関分析

①大学生版「居場所」の心理的機能尺度得点とSTAI得点の相関分析結果

まず、大学生版「居場所」の心理的機能尺度合計得点とSTAI得点の相関係数を算出したところ、統計的に有意な相関関係は見られなかった ($r=-.074$, n.s.)。しかし、大学生版「居場所」の心理的機能尺度は7つの因子で構成されており、各因子ともに異なる性質を持つ可能性があることを考慮し、各因子得点とSTAI得点の相関関係も算出することとした。

各因子ごとに見ていくと、STAI得点と相関関係がある因子は、第Ⅱ因子「自然体」($r=-.124$, $p<.10$)と第Ⅵ因子「自己肯定感」($r=-.214$, $p<.01$)の2因子であった【表2参照】。他の因子は、STAI得点との関連は見られなかった。したがって、大学生版「居場所」の心理的機能尺度とSTAIの関係性から、大学生版「居場所」の心理的機能尺度の特定因子とSTAI得点との関係性は示唆されたが、尺度の妥当性が確認されたとはいえなかった。ただ「居場所」の心理的機能の一部分を構成する「自然体」因子、「自己肯定感」因子と、STAI得点との間に有意な相関関係は見られたので、「居場所」の心理的機能の中に、状態不安と関係する要素が含まれていることは統計的に示された。

【表2】 大学生版「居場所」の心理的機能各因子得点×STAI得点の相関分析表

STAI得点	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ	因子Ⅵ	因子Ⅶ
Pearsonの相関係数	.009	-.124+	.012	.019	.028	-.214**	-.093
有意確率	.899	.095	.873	.800	.706	.004	.209
N	183	183	183	183	183	183	183

+ $p<.10$ ** $p<.01$

②大学生版「居場所」の心理的機能尺度と自尊感情尺度得点の相関分析結果

大学生版「居場所」の心理的機能尺度合計得点と自尊感情尺度得点の相関係数を算出したところ、統計的に有意な相関関係は見られなかった ($r=.073$, n.s.)。しかし、先ほどと同様に大学生版「居場所」の心理的機能尺度は7つの因子で構成されており、各因子ともに異なる性質を持つ可能性があることを考慮し、STAI得点の際と同様に、各因子得点と自尊感情尺度得点の相関関係も算出することとした。

各因子ごとに見ていくと、自尊感情尺度得点と相関関係がある因子は、第Ⅵ因子「自己肯定感」($r=.232$, $p<.01$)のみであった【表3参照】。他の因子は、自尊感情尺度得点との関連は見られなかった。したがって、大学生版「居場所」の心理的機能尺度と自尊感情尺度の関係性から、大学生版「居場所」の心理的機能尺度の妥当性は、ここでは支持されたとは言えなかった。しかし、「居場所」の心理的機能の一部分を構成する「自己肯定感」因子と、自尊感情尺度との有意な相関関係は見られたので、「居場所」の心理的機能の中に、自尊感情と関係する要素が含まれていることは統計的に示された。

【表3】 大学生版「居場所」の心理的機能各因子得点×自尊感情尺度得点の相関分析表

自尊感情得点	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ	因子Ⅵ	因子Ⅶ
Pearsonの相関係数	.073	-.028	.004	.019	-.051	.232**	.022
有意確率	.325	.708	.955	.796	.495	.002	.766
N	183	183	183	183	183	183	183

** $p<.01$

4. 考察

(1) 因子分析について

予備調査の結果から、杉本・庄司¹⁸ (2006) が小・中・高校生のデータを基に作成した「居場所」の心理的機能に関する尺度は、大学生においてもほぼ同様の因子構造で使用できることがわかった。これはつまり、小・中・高・大学生と発達段階や年齢は違えども、「居場所」の心理的機能を構成する要因、因子は基本的な部分では共通しているものがあると考えられるのではないだろうか。本研究においては、杉本・庄司¹⁹ (2006) の尺度を全くそのまま用いて因子構造の確認を行ったため、先行研究と同様の因子構造になりやすかったという可能性はあるが、高校生までを調査対象に含めた先行研究の「居場所」の心理的機能の因子構造は、その後の年齢層、少なくとも大学生においてもかなり適切な構造を示していたと考えることができる。

(2) 妥当性について

大学生版「居場所」の心理的機能尺度の全体得点と、STAI得点、自尊感情得点との相関を見た結果、いずれも有意な相関関係は見られなかった。この原因として、大きく以下の2つの理由が考えられる。

1つ目は、「居場所」の心理的機能との関連が予測される外部基準の選定の誤りである。本研究の予備調査においては、大学生における「居場所」の心理的機能がどのような因子構造になり、どのような内容の因子が抽出されるのかということが予測できなかった部分がある。したがって、「居場所」の心理的機能との関連が予測される外部基準を、藤竹²⁰ (2000) や忠井²¹ (2006) を参考に予測的に選定したという過程がある。つまり、どのような因子構造が確認されるか不明の段階の大学生版「居場所」の心理的機能尺度に対して、藤竹²² (2000) や忠井²³ (2006) の指摘から、“安心感”と関係が予測される“個人的居場所機能”と“自尊心”との関係が予測される“社会的居場所機能”の大きく2つの因子は最大公約数的に存在すると仮定し、この2つの仮定因子との関連が予測される外部基準として、「STAI得点」と「自尊感情尺度得点」を選定した。しかし、このように選定された外部基準がそもそも適切ではなかった可能性は拭い去れない。このような外部基準の選定をしたのは、筆者の妥当性検討に対する認識が不足していたことと、「居場所」の心理的機能という構成概念に対する考慮不足であったことがその原因であると考えられる。不徳の致すところである。

2つ目は、大学生版「居場所」の心理的機能尺度を構成する7因子ごとに、関連が予測される外部基準が異なるのではないかとということである。先述のように本研究においては、「STAI得点」と「自尊感情尺度得点」との関連が見られた因子が存在した。すなわち、第II因子「自然体」は「STAI得点」との関連が見られ、第VI因子「自己肯定感」は「STAI得点」「自尊感情尺度得点」双方との関連が見られた。この結果から、「自然体」と「自己肯定感」因子は、状態不安や自尊感情との関連が予測される因子と考えることができる。

このように、各因子によって関連が予測される外部基準が異なる可能性が示唆され、結果として、

「居場所」の心理的機能尺度全体の得点としては、外部基準との関連がみられなかった可能性も考えられる。今後は各因子の特性を明確に把握した上で、より妥当な関係性が予測される外部基準を選定し、その外部基準との関連を見る追研究が必要である。

Ⅲ. 本調査

1. 目的

本調査では、予備調査で確認された大学生版「居場所」の心理的機能尺度を用いて、主に以下の3つの点を探ることに主眼を置く。その3つの点は、①「居場所」の心理的機能尺度得点と「抑うつ感」、「アイデンティティの確立」尺度得点間の関係性を探る、②各「居場所」に特有の心理的機能について探る、③居場所がないと回答した被調査者が居場所であって欲しいと思う場所の特徴を探る、である。

「居場所」と「抑うつ感」の関係性については、田島²⁴ (2000) が指摘しているが、その調査方法は個別面接調査を主としたものであり、本研究のように質問紙調査を用いての実証的研究として位置づけられる研究とは異なる。また、本研究のように「居場所」の心理的機能という概念と「抑うつ感」の関係性を取り上げた研究は見当たらない。「居場所」の有・無という観点から、被調査者の「抑うつ感」を見ることも重要な視点ではあるが、「居場所」があるという被調査者においても、その「居場所」のいかなる特徴・心理的機能と「抑うつ感」は関係性があるのかという視点も「居場所」と精神的健康の関係性を探るにあたっては重要になってくると考えられる。したがって、本研究では「居場所」の心理的機能と「抑うつ感」の関係性を、双方質問紙調査を用いることによって、実証的な基礎的データを提示することを1つの目的としたい。

「居場所」と「アイデンティティの確立」の関係性については、その実証的研究として堤²⁵ (2002) が挙げられる。堤²⁶ (2002) では、2因子23項目からなる「居場所がない」感覚尺度を作成し、その尺度と自我同一性混乱尺度との相関関係を見ている。したがって堤²⁷ (2002) では、「居場所の感覚は、ここが自分の居場所だという肯定的感覚よりは、むしろここは自分の居場所ではないという否定的意識を通してこそ実感されていると思われる」と述べられており、「居場所」が認識されるのは否定的意識を通してであるという考え方を押し出している。その考え方も示唆に富むものではあるが、本研究においては、「居場所」の肯定的・否定的側面という視点よりも、「居場所」の持つ特徴や心理的機能という、いわば「居場所」を中立的なものとして捉えてそれを探求したいという考えが根底にあるので、「居場所」の心理的機能尺度という「居場所」の特徴や心理的機能を測定できる尺度を用いることとした。同時に、「アイデンティティの確立」に関しても、「居場所」の心理的機能が「アイデンティティの確立」に寄与する部分があるかどうかを探求したいという考えが根底にあるので、「アイデンティティの確立」尺度を用いることとした。「居場所」の心理的機能と「アイデンティティの確立」の双方の関係性について、統計的手法を用いて実証的に検討することが本研究1つの目的となる。

各「居場所」に特有の心理的機能を探るについてだが、本研究では「居場所」の分類として杉本・庄司²⁸（2006）を参考に以下の3つの分類を行った。1つ目は「自分1人の居場所」、2つ目は「家族のいる居場所」、3つ目は「家族以外の人々のいる居場所」である。これらの3つは同じ「居場所」という大きな枠組みでは一括りにされるが、どの場所が「居場所」となっているのかによって、そこで得られるものは異なってくると考えられる。そこで本研究では、「居場所」を上記の3つに分類した上で、それぞれの「居場所」がどのような特有の心理的機能をもっているかということを探求したい。同じ「居場所」があるという状態の被調査者であっても、選んだ「居場所」の種類によって、各人が受ける心理的影響が異なってくるのではないかという問題も、この部分の分析によって明らかにする。

最後に「居場所」がないと回答した被調査者が「居場所」であって欲しいと思う場所の特徴を探るについてだが、実際に心理的援助をすることを考えた場合、まず「居場所」がない状態の人々から援助することを考えるのが第一である。本研究では、「居場所」があると回答した被調査者においては「居場所」の心理的機能と精神的健康の関連性を見るが、それだけでは「居場所」がないと回答した人々の実態把握ができない。そこで、本研究においては、「居場所」がないと回答した人々に対しても、「居場所であって欲しいと望む場所」や「その場所に望む心理的機能」を回答してもらうことによって、「居場所」がない人々が“どのような場所”を「居場所」に望む傾向があるのか、“その望む「居場所」にいかなる心理的機能を求めているのか”ということを探ることも目的の1つとしたい。これにより、「居場所」がない状態の人々に、心理的援助をする際の1つの手がかりを見出したい。

2. 方法

大学生を対象として、予備調査から因子構造を確定させた大学生版の「居場所」の心理的機能尺度、“抑うつ感”を測定する福田・小林（1983）²⁹日本語版SDS、“アイデンティティの確立”を測定する下山³⁰（1992）“アイデンティティ尺度”の3つ尺度を掲載した質問紙調査を実施した。以下被調査者、調査の実施方法、各質問紙の構成について概説する。

(1) 被調査者

被調査者は私立A大学の学生1年～4年生計228名である。回答者の内訳は、男性83名、女性145名。学年の内訳は、1年生45名、2年生79名、3年生88名、4年生16名である。

(2) 調査期日

2007年9月25日～10月4日

(3) 調査方法

講義終了後の時間で受講生にアンケート調査へのご協力をいただいた。実施時間は15分程度で、実

施場所は講義が行われた各教室であった。アンケートに回答していただく前に、調査の内容や趣旨を簡単に説明し、無記名なので回答者が特定されないことや、アンケート調査の内容が講義の成績とは関係ないこと等も併せて説明した。調査への協力は強制ではないことも説明し、受講生に無理矢理ご協力いただくことは極力避けるよう心がけた。

(4) 調査内容

【質問紙の構成】

- ①フェイスシート（学年、年齢、性別、サークルに入っているか否か など）
- ②自己認知する「居場所」に関する質問（「居場所」の有無、具体的な「居場所」など）
- ③予備調査で確認した大学生版「居場所」の心理的機能尺度（5件法）
- ④福田・小林³¹（1983）の日本語版SDS（4件法）
- ⑤下山³²（1992）のアイデンティティ尺度（4件法）

3. 結果

(1) 重回帰分析

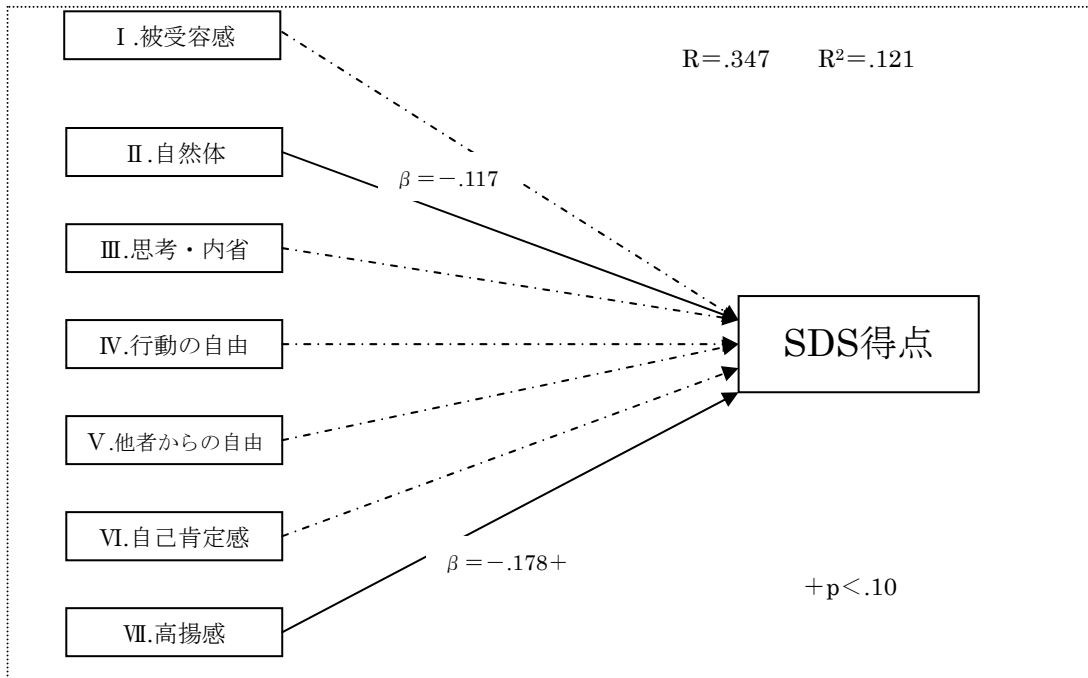
①「居場所」の心理的機能尺度の各因子得点×SDS得点の重回帰分析

まず重回帰分析の結果から、重相関係数 $R = .347$ 、重決定係数 $R^2 = .121$ であった【図1参照】。 $R^2 = .121$ という結果は筆者の予想より低いものであり、この12%の説明率という結果から鑑みると、SDS得点を予測する大きな要因は、「居場所」の心理的機能以外に存在する可能性が示唆された。ただ全体としての説明率は低いが、「居場所」の心理的機能の7つの因子の中で、第Ⅶ因子の「高揚感」のみSDS得点に有意傾向で寄与していた（ $\beta = -.178$ 、 $p < .10$ ）。その他の因子でSDS得点への寄与ががらうじて予測される因子としては、第Ⅱ因子の「自然体」が考えられた（ $\beta = -.117$ 、13%水準の有意差）【図1、表4参照】。この2つの因子に関しては考察に値すると考えられるので、後の考察の節で検討する。

【表4】 「居場所」の心理的機能各因子×SDS得点の重回帰分析結果

モデル	非標準化係数		標準化係数	T	有意確率
	B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差
1 (定数)	57.075	4.374		13.050	.000
因子Ⅰ合計	-.054	.091	-.054	-.596	.552
因子Ⅱ合計	-.250	.166	-.117	-1.510	.133
因子Ⅲ合計	.144	.124	.089	1.161	.247
因子Ⅳ合計	-.002	.195	-.001	-.009	.993
因子Ⅴ合計	-.001	.160	-.001	-.007	.994
因子Ⅵ合計	-.212	.176	-.093	-1.205	.230
因子Ⅶ合計	-.440	.228	-.178	-1.933	.055

【図1】 「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×SDS得点の重回帰分析パス図



②「居場所」の心理的機能各因子×アイデンティティ確立尺度得点の重回帰分析

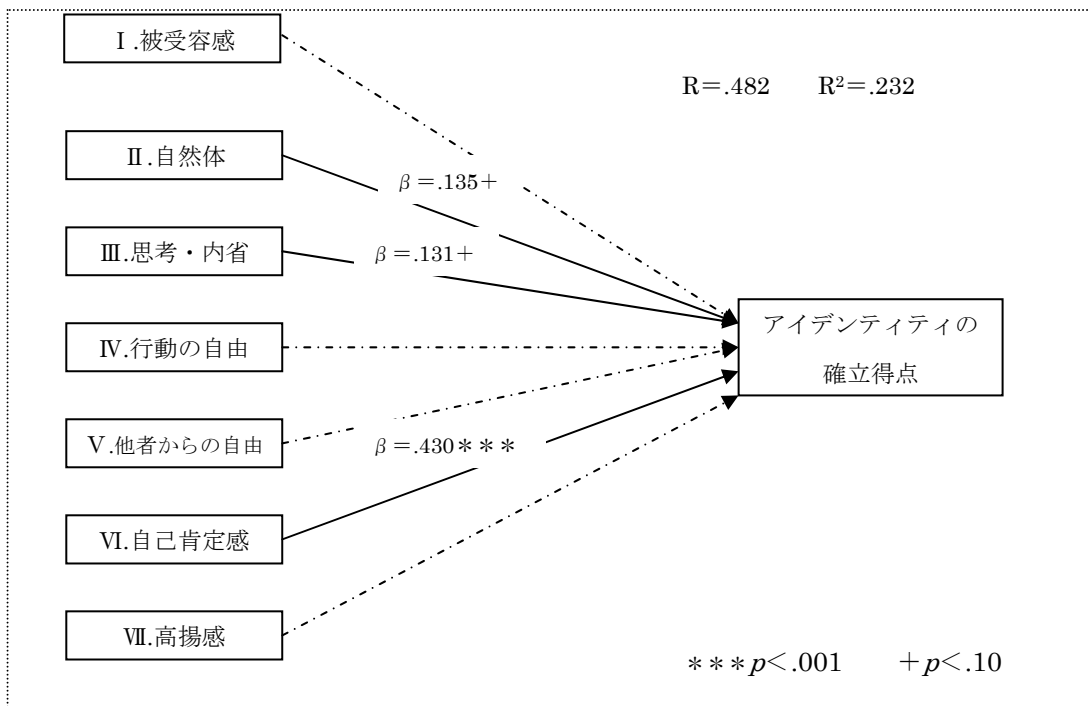
次に、大学生版「居場所」の心理的機能尺度の各因子得点×アイデンティティ確立尺度得点の重回帰分析を行った。その結果、重相関係数 $R = .482$ 、重決定係数 $R^2 = .232$ であった【図2参照】。したがって、これらの「居場所」の心理的機能の7つの因子によって、SDS得点の分散の中の23%が予測されるという結果となった。この値は高い値とは言えないが、先述の「居場所」の心理的機能の各因子得点とSDS得点との関係性に比べると、「アイデンティティ確立」尺度得点の方が、「居場所」の心理的機能と関係があるとも言える。

具体的に、「居場所」の心理的機能の7因子の中で、「アイデンティティ確立」得点に有意に寄与していたのは、第VI因子「自己肯定感」であった（ $\beta = .430$ 、 $p < .001$ ）。さらに、第II因子の「自然体」が有意傾向で「アイデンティティ確立」得点に寄与し（ $\beta = .135$ 、 $p < .10$ ）、第III因子の「思考・内省」も有意傾向で「アイデンティティ確立」得点に寄与している（ $\beta = .131$ 、 $p < .10$ ）という結果になった【表5、図2参照】。

【表5】 「居場所」の心理的機能各因子×アイデンティティ確立尺度得点の重回帰分析結果

モデル		非標準化係数		標準化係数	T	有意確率
		B	標準誤差	ベータ	B	標準誤差
1	(定数)	12.005	3.240		3.706	.000
	因子 I 合計	.011	.067	.013	.158	.874
	因子 II 合計	.229	.123	.135	1.867	.063
	因子 III 合計	.168	.092	.131	1.820	.070
	因子 IV 合計	-.200	.145	-.133	-1.385	.167
	因子 V 合計	-.013	.118	-.011	-.107	.915
	因子 VI 合計	.780	.130	.430	5.987	.000
	因子 VII 合計	-.025	.169	-.013	-.146	.884

【図2】 「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×アイデンティティ確立尺度得点の重回帰分析パス図

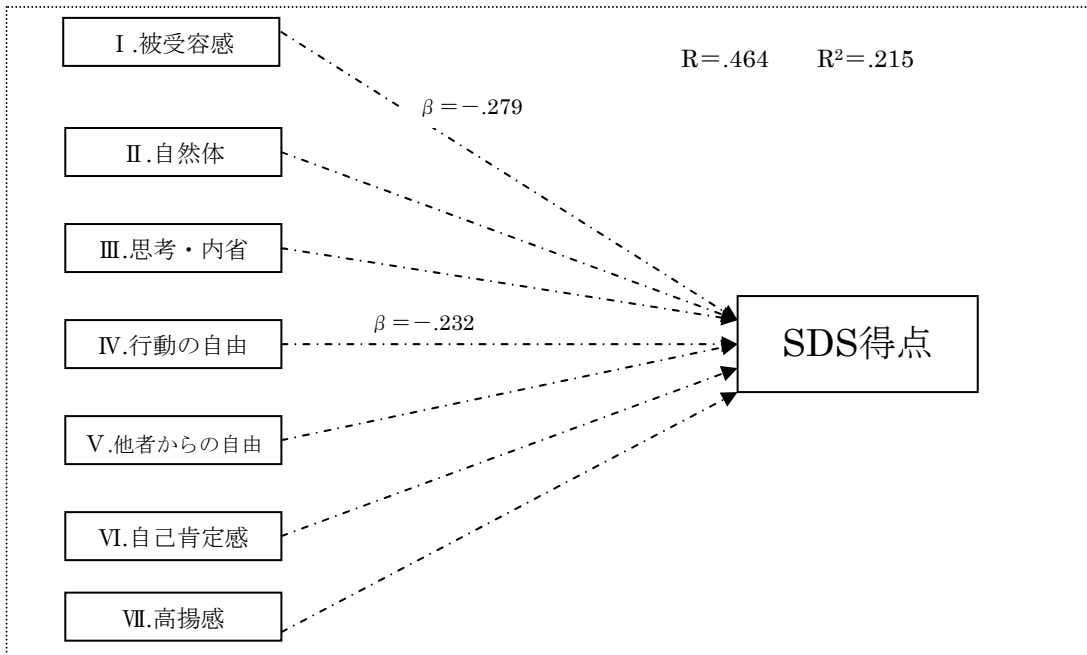


● これ以降は、3種類の各「居場所」を選択した被調査者のデータのみをピックアップして、「居場所」の心理的機能とSDS得点、アイデンティティ確立の関係性を重回帰分析によってそれぞれ見ていく。なお、原稿掲載の都合上、結果については、説明文は一切省き、パス図のみの掲載となる点をご了承頂きたい。

③ 「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×SDS得点の重回帰分析 【図3参照】

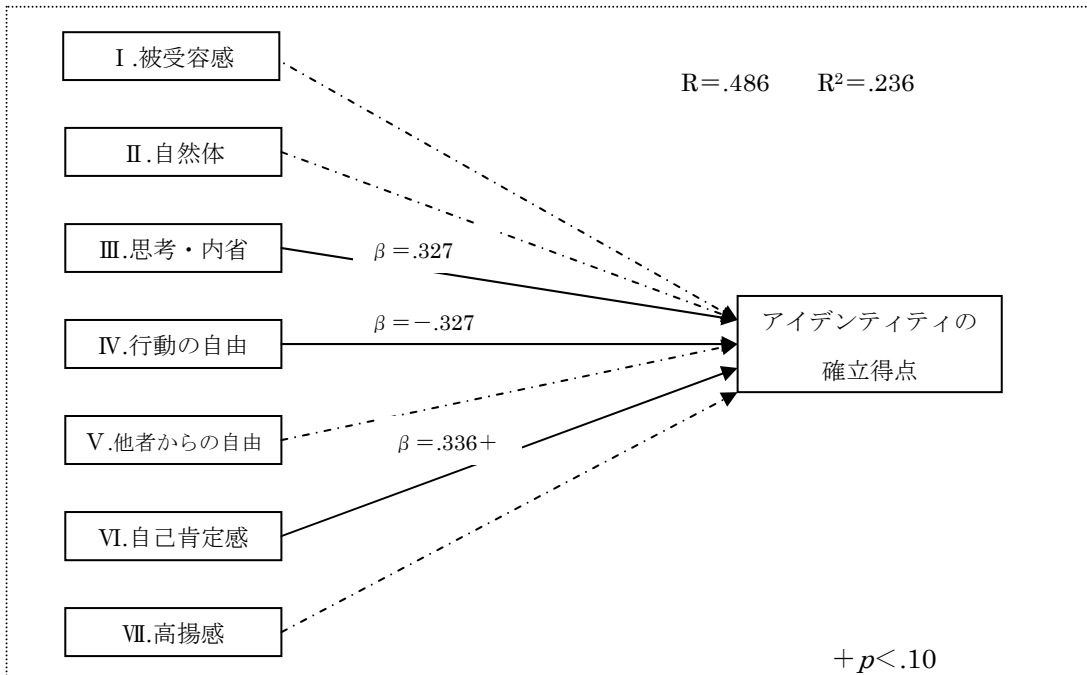
(1人の居場所の被調査者44名のみ)

【図3】 「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×SDS得点の重回帰分析パス図



④「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×アイデンティティ確立尺度得点の重回帰分析
(1人の居場所の被調査者44名のみ) 【図4参照】

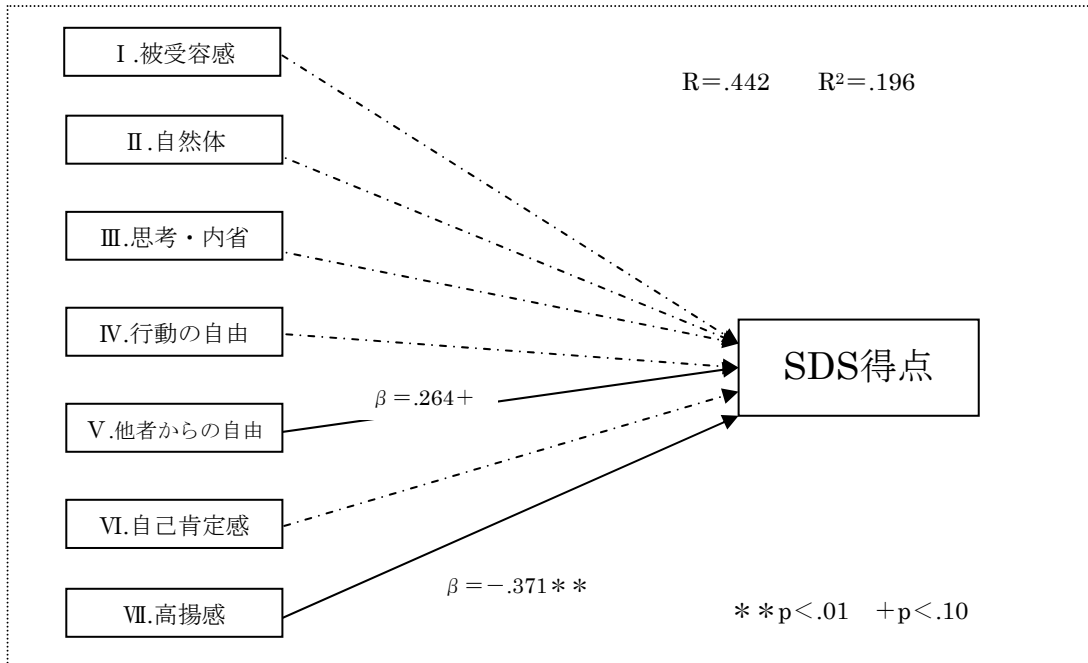
【図4】 「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×アイデンティティ確立尺度得点の重回帰分析パス図



⑥ 「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×SDS得点の重回帰分析

(家族のいる居場所の被調査者65名のみ) 【図5参照】

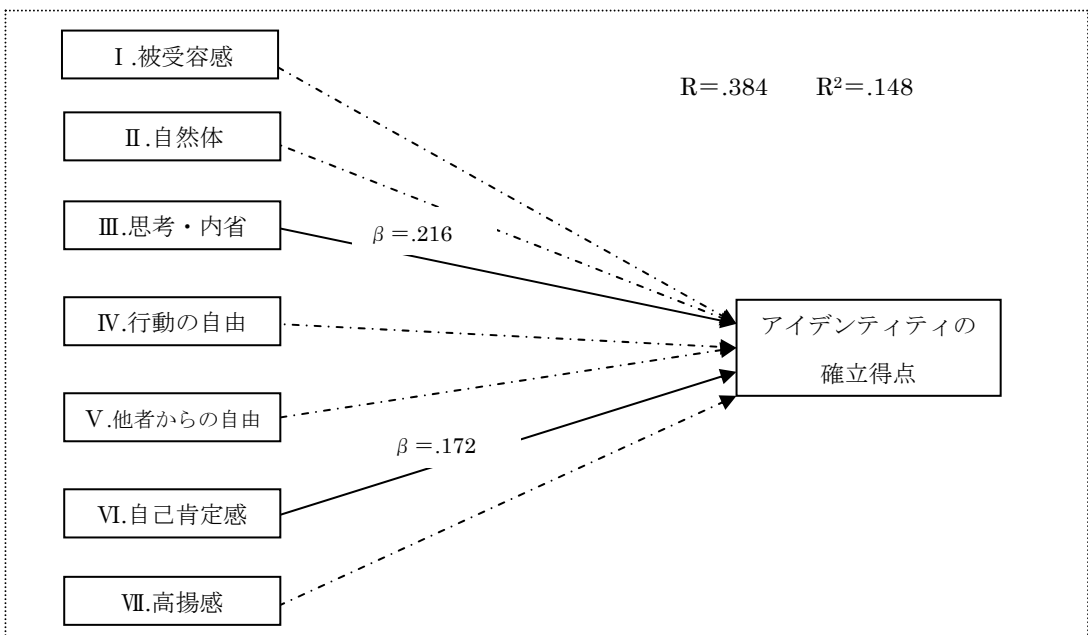
【図5】「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×SDS得点の重回帰分析パス図



⑥ 「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×アイデンティティ確立尺度得点の重回帰分析

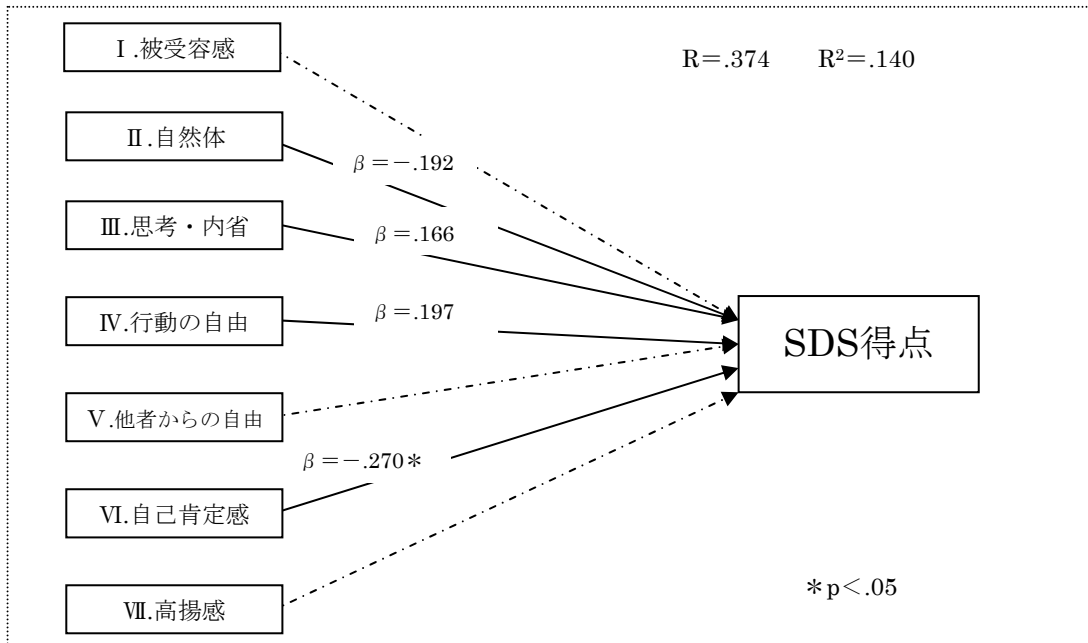
(家族のいる居場所の被調査者65名のみ) 【図6参照】

【図6】 「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×アイデンティティ確立尺度得点の重回帰分析パス図



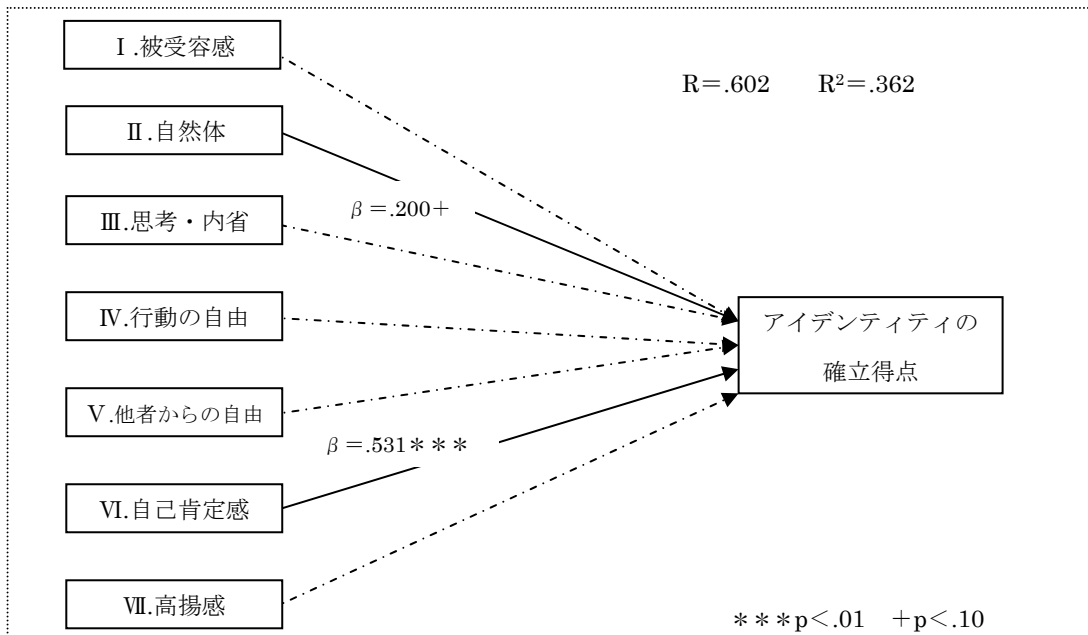
⑦ 「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×SDS得点の重回帰分析
 (家族以外の人のある居場所の被調査者109名のみ) 【図7参照】

【図7】 「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×SDS得点の重回帰分析パス図



⑧ 「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×アイデンティティ確立尺度得点の重回帰分析
 (家族以外の人のある居場所の被調査者109名のみ) 【図8参照】

【図8】 「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×アイデンティティ確立尺度得点の重回帰分析パス図



(2) 分散分析

⑨居場所分類による各居場所の心理的機能、特徴について

「居場所」の分類×各因子得点の1要因分散分析の結果、「居場所」の種類によって特有の心理的機能が見出された【表6参照】。

表6	item	7	5	5	4	4	4	4
	N	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ	因子Ⅵ	因子Ⅶ
		被受容感	自然体	思考・内省	行動の自由	他者からの自由	自己肯定感	高揚感
1.自分1人のいる居場所	44	2.70	4.28	4.03	4.40	4.33	3.39	3.67
2.家族のいる居場所	65	4.39	4.50	3.65	3.81	3.40	3.47	4.40
3.家族以外の人のある居場所	109	4.61	4.21	3.36	3.21	2.25	3.80	4.57
F値		119.73	4.18	10.17	34.49	99.32	6.01	31.11
Tukeyの多重比較		1<2,3	1,3<2	2,3<1	3<2<1	3<2<1	1,2<3	1<2,3

表6の結果から、「自分1人の居場所」は、「思考・内省」、「行動の自由」、「他者からの自由」の心理的機能が高いが、「被受容感」、「自己肯定感」、「高揚感」は低いことが分かる。「家族のいる居場所」は、「被受容感」、「自然体」、「高揚感」の心理的機能が高いが、「思考・内省」、「自己肯定感」は低いことが分かる。「家族以外の人のある居場所」は、「被受容感」、「自己肯定感」、「高揚感」の心理的機能は高いが、「自然体」、「思考・内省」、「行動の自由」、「他者からの自由」は低いことが分かる。

(3)「居場所」がないと答えた被調査者の調査結果

本調査において、「居場所」がないと回答した被調査者は全部で10名であった。以下の表では「居場所」がないと回答した被調査者の基本データを示してある。

まず表7は「居場所」なし群のフェイスシート項目内容である。その内訳について以下に簡単に記載する【表7参照】。この表から「居場所」がない被調査者の特徴が見て取れる。

【表7】：「居場所」なし被調査者のフェイスシート項目回答内容

Sub,No	学年	年齢	性別	サークル	住形態	話せる家族	一人部屋	実家離れ
17	2	19	女	入	アパート	有	有	1年
34	2	20	男	入	アパート	有	無	2年
50	2	19	女	入	アパート	無	有	2年
61	2	19	女	入	アパート	無	有	2年
91	4	22	女	無	アパート	無	有	5年
140	3	21	男	無	アパート	無	有	6年
160	3	20	女	入	アパート	有	有	3年
166	3	21	女	入	アパート	無	有	3年
184	1	18	男	入	実家	有	無	0年
221	1	19	男	入	寮	有	無	1年

続いて「居場所」なし被調査者が「居場所」であって欲しいと望む場所とその分類についてその内訳を以下に記す【表8参照】。

この内訳を見ると、「居場所」がない人の大半（90%）は、「家族以外の人のいる居場所」を「居場所」であって欲しい場所と望んでいる。その中でも60%の人が、大学関係組織を「居場所」であって欲しい場所と望んでいる。この傾向から鑑みても、大学において「居場所」を失っている人に対して、大学側が学内に何らかの「居場所」を提供することが、援助効果を持つ施策である可能性が示唆された。

【表8】：「居場所」なし被調査者が「居場所」であって欲しいと望む場所とその分類

Sub,No	居場所分類	「居場所」あって欲しいと望む場所
17	家族以外	友人
34	自分1人	わからない。でも何年か後に見つけられると思う
50	家族以外	クラブ
61	家族以外	わからない。
91	家族以外	学校
140	家族以外	クラブ
160	家族以外	大学
166	家族以外	自分の気持ちをわかってくれる人
184	家族以外	学校
221	家族以外	クラブの仲間という居場所

以下の表9は、「居場所」がないと回答した各被調査者が、一番であって欲しいと望む「居場所」に対して、どの心理的機能を望んでいるのかということを示すものである。

【表9】：「居場所」なし被調査者の「居場所」の心理的機能尺度得点とSDS得点、

アイデンティティ確立尺度得点の内訳

Sub,No	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ	因子Ⅳ	因子Ⅴ	因子Ⅵ	因子Ⅶ	各因子総計	SDS合計	I D確立
17	29	25	16	12	9	16	19	126	50	27
34	31	22	12	6	5	19	19	114	44	33
50	23	10	17	10	8	10	10	88	48	22
61	29	21	15	6	7	18	16	112	43	15
91	15	5	21	16	16	8	8	89	44	19
140	31	25	22	17	19	20	20	154	51	30
160	29	11	17	12	7	8	17	101	57	20
166	32	25	17	12	16	16	18	136	62	21
184	20	13	22	8	7	8	13	91	56	21
221	35	25	14	17	12	17	20	140	47	15
平均	27.4	18.2	17.3	11.6	10.6	14	16	115.1	50.2	22.3
項目平均	3.91	3.64	3.46	2.9	2.65	3.5	4.0			

表9の各因子得点の平均値を見てみると、因子Ⅰ「被受容感」が27.4点と一番高く、続いて因子Ⅱ「自然体」が18.2点で2番目、因子Ⅲ「思考・内省」17.3点が3番目、以下は、因子Ⅶ「高揚感」16点、因子Ⅵ「自己肯定感」14点、因子Ⅳ「行動の自由」11.6点、因子Ⅴ「他者からの自由」10.6点と続く。

表9で示した各因子間の得点差を統計的に検定するために、各因子得点間で分散分析を行った。その結果を表10、表11で示す。

表10から、「居場所」がない被調査者が「居場所」であって欲しい場所に望む「居場所」の心理的機能の各因子得点の間に統計的な有意差があることがわかった。したがって、表11では、その多重比較を行った。

その結果、因子Ⅰ「被受容感」の得点は、他のどの因子得点とも有意な差が見られた。したがって、「居場所」の心理的機能の中で、「被受容感」は他のどの心理的機能よりも「居場所」に望まれている心理的機能であるということがわかった。

因子Ⅱの「自然体」因子の得点は、「行動の自由」や「他者からの自由」の因子得点とは有意傾向、もしくは有意な得点差が見られた。したがって、「居場所」がない被調査者が「居場所」に対して望んでいるのは「自由」よりも「自然体」という心理的機能であることがわかった。

因子Ⅲの「思考・内省」は「他者からの自由」因子と有意傾向の差が見られた。

因子Ⅵの「自己肯定感」と因子Ⅶの「高揚感」は、因子Ⅰ以外の因子得点とはまったく有意な差が見られなかった。したがって、「自己肯定感」、「高揚感」という「居場所」の心理的機能は、因子Ⅰ「被受容感」を除く他の心理的機能の因子と比べて、特に得点が高いわけでも、低いわけでもないという結果になった。このことは、素点の得点順で「高揚感」が4番目、「自己肯定感」が5番目であったことから示唆されることではある。このことから、「居場所」がないと回答した被調査者は、「居場所」に「高揚感」や「自己肯定感」を特別に望んでいるわけではないということが、統計的結果からも示された。

【表10】 「居場所」なし群の「居場所」の心理的機能各因子得点間の差の検定結果

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	1876.371	6	312.729	11.449	.000
グループ内	1720.900	63	27.316		
合計	3597.271	69			

【表11】 「居場所」なし群「居場所」の心理的機能各因子得点間の差の検定の多重比較結果

多重比較

従属変数: 因子得点

Tukey HSD

(I) 因子名	(J) 因子名	平均値の 差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					下限	上限
1	2	9.200*	2.337	.004	2.08	16.32
	3	10.100*	2.337	.001	2.98	17.22
	4	15.800*	2.337	.000	8.68	22.92
	5	16.800*	2.337	.000	9.68	23.92
	6	13.400*	2.337	.000	6.28	20.52
	7	11.400*	2.337	.000	4.28	18.52
2	1	-9.200*	2.337	.004	-16.32	-2.08
	3	.900	2.337	1.000	-6.22	8.02
	4	6.600	2.337	.087	-.52	13.72
	5	7.600*	2.337	.029	.48	14.72
	6	4.200	2.337	.555	-2.92	11.32
	7	2.200	2.337	.964	-4.92	9.32
3	1	-10.100*	2.337	.001	-17.22	-2.98
	2	-.900	2.337	1.000	-8.02	6.22
	4	5.700	2.337	.200	-1.42	12.82
	5	6.700	2.337	.078	-.42	13.82
	6	3.300	2.337	.793	-3.82	10.42
	7	1.300	2.337	.998	-5.82	8.42
4	1	-15.800*	2.337	.000	-22.92	-8.68
	2	-6.600	2.337	.087	-13.72	.52
	3	-5.700	2.337	.200	-12.82	1.42
	5	1.000	2.337	.999	-6.12	8.12
	6	-2.400	2.337	.946	-9.52	4.72
	7	-4.400	2.337	.499	-11.52	2.72
5	1	-16.800*	2.337	.000	-23.92	-9.68
	2	-7.600*	2.337	.029	-14.72	-.48
	3	-6.700	2.337	.078	-13.82	.42
	4	-1.000	2.337	.999	-8.12	6.12
	6	-3.400	2.337	.770	-10.52	3.72
	7	-5.400	2.337	.255	-12.52	1.72
6	1	-13.400*	2.337	.000	-20.52	-6.28
	2	-4.200	2.337	.555	-11.32	2.92
	3	-3.300	2.337	.793	-10.42	3.82
	4	2.400	2.337	.946	-4.72	9.52
	5	3.400	2.337	.770	-3.72	10.52
	7	-2.000	2.337	.978	-9.12	5.12
7	1	-11.400*	2.337	.000	-18.52	-4.28
	2	-2.200	2.337	.964	-9.32	4.92
	3	-1.300	2.337	.998	-8.42	5.82
	4	4.400	2.337	.499	-2.72	11.52
	5	5.400	2.337	.255	-1.72	12.52
	6	2.000	2.337	.978	-5.12	9.12

*. 平均の差は .05 レベルで重要です。

次に、「居場所」がないと回答した被調査者が「居場所」に望む心理的機能の特徴や、SDS得点、アイデンティティ確立得点が、「居場所」があると回答した被調査者とどのように異なっているのかと示すために、「居場所」あり群の各尺度の得点と、「居場所」なし群の各尺度の得点を比較した。ただ、「居場所」なし群において「居場所」であって欲しいと望む場所に回答された場所は、10人中9人が「家族以外の人がいる居場所」に分類される居場所であった。そこで、「居場所」あり群においても、同じ「居場所」カテゴリーの被調査者と比較する必要があると考え、ここでは、「居場所」ありと回答した被調査者の中で、「家族以外の人といる居場所」を選択した109名のデータと、「居場所」なしと回答した被調査者の中で「家族以外の人といる居場所」を「居場所」であって欲しい場所と選択した9名のデータのみを比較検討することとした。

	①「居場所」あり群	②「居場所」なし群	①－②
因子Ⅰ「被受容感」・・・	32.24点	27.00点	5.24点
因子Ⅱ「自然体」・・・	21.04点	17.78点	3.26点
因子Ⅲ「思考・内省」・・・	16.79点	17.89点	－1.1点
因子Ⅳ「行動の自由」・・・	12.85点	12.22点	0.63点
因子Ⅴ「他者からの自由」・	9.01点	11.22点	－2.21点
因子Ⅵ「自己肯定感」・・・	15.19点	13.44点	1.75点
因子Ⅶ「高揚感」・・・	18.27点	15.67点	2.6点
各因子合計得点・・・	125.38点	115.22点	10.16点
SDS得点・・・	40.68点	50.89点	－10.21点
アイデンティティ得点・・・	28.65点	21.11点	7.54点

このように各因子得点に関しては、「思考・内省」と「他者からの自由」を除いては、「居場所」あり群のほうが「居場所」なし群よりも得点が高くなっていることがわかった。ここでいう「居場所」あり群は、実際にある「家族以外の人といる居場所」を想定して回答してもらった得点を表している。上記の得点は実際の「家族以外の人といる居場所」の心理的機能を反映している数値となっている。一方で「居場所」なし群の数値は、「居場所」であって欲しい場所に望む「居場所」の心理的機能を想定して回答してもらった得点なので、この得点は「居場所」がない被調査者が「居場所」に望む、想像上の期待値を表す数値となっている。したがって、「居場所」あり群の得点と「居場所」なし群の得点の差は、「居場所」あり群が現実の「居場所」で得られている心理的機能であり、「居場所」なし群が想像上「居場所」に望む心理的機能であるという点で、いわば現実と期待・希望の差を見るということになる。素点の①－②の差に関して、分散分析によってその差の統計的検討をおこなった結果、因子Ⅰ「被受容感」、因子Ⅱ「自然体」、因子Ⅴ「他者からの自由」（有意傾向）、因子Ⅶ「高揚感」、「各因子合計得点」、「SDS得点」、「アイデンティティ得点」において、両群の得点差に統計的な

有意差 ($p < .05$) が見られた。

4. 考察

(1) 重回帰分析の考察

①：「居場所」の心理的機能尺度の各因子得点×SDS得点の重回帰分析の考察

考察Point1：「居場所」の心理的機能の因子の中で「高揚感」因子の得点が高い人は、SDS得点が低い傾向がある。

考察Point2：「居場所」の心理的機能の因子の中で「自然体」因子の得点が高い人は、SDS得点が低い傾向がある。

まず、Point1について考えてみたい。「居場所」の心理的機能尺度の中の第Ⅶ因子「高揚感」を構成する項目は、「おもしろい」「楽しい」「幸せ」「満足する」の4項目である。これらの4つの項目に共通することとして、“ポジティブな感情価”を伴った項目であるということが考えられる。つまり、これらの4つの項目が満たされているという状態は、精神的な充足感があり、またそれ以上の良い意味での気持ちの高まりも存在している状態であると考えることができる。一方SDSを構成する20項目の中には、“気分が沈んで憂うつだ”という「憂うつ」の項目、“生活はかなり充実している”という「空虚」の項目（逆転項目），“日頃していることに満足している”という「不満足」の項目（逆転項目）などが含まれている。これらのSDSにおける「憂うつ」「空虚」「不満足」の項目は、「高揚感」の4つの項目が“ポジティブな感情価”を伴っているのに対して、“ネガティブな感情価”を伴っていると考えることができる。したがって、「高揚感」を構成する4項目と、SDSの項目群の間に負の関係性があることが考えられる。

次にPoint2について考察する。「居場所」の心理的機能尺度の第Ⅱ因子「自然体」を構成する5項目は、「本当の自分でいられる」「自分らしくいられる」「素直になれる」「無理をしなないでいられる」「安心する」の5項目である。これらの項目に共通するのは、自分が抱く主観的な自己像と実際に表出している社会的な自己像の一致した状態であり、それに伴う感情としての「安心感」であると考えられる。つまり「居場所」において「自然体」の心理的機能の得点が高い状態は少なくとも、(i) その「居場所」においてその人自身が自己一致や安定を意識していて「安心感」を感じられていること、(ii) その人自身が無理をせず安定していることを受け入れる周囲の環境があって「安心感」を感じられていること、という2つの側面があると考えることができる。いずれも「自然体」の心理的機能としての「安心感」を表しているわけだが、これは「不安」や「焦燥」などの感情が強い状態である抑うつ状態とは、逆方向の精神状態であると考えることができる。

②：「居場所」の心理的機能各因子×アイデンティティ確立尺度得点の重回帰分析の考察

考察Point1：「居場所」の心理的機能の因子の中で「自己肯定感」因子の得点が高い人は、アイデンティティ確立尺度の得点も高い。

考察Point2：「居場所」の心理的機能の因子の中で「自然体」因子の得点が高い人は、アイデンティティ確立尺度の得点も高い傾向がある。

考察Point3：「居場所」の心理的機能の因子の中で「思考・内省」因子の得点が高い人は、アイデンティティ確立尺度の得点も高い傾向がある。

Erikson³³ (1959) は「青年は、自由な役割実験を通して、社会の中に、適所 (niche) を発見する。・・・ (中略) ・・・この適所を発見する中で、青年は、内的な連続性と社会的な斉一性の確かな感覚を得るのである」と述べている。このEriksonの記述に対して、小沢³⁴ (2000) は、「エリクソンはここで、適所、言い換えれば、居場所を得ることによって、アイデンティティの感覚を持つことができると述べている。」と解釈している。エリクソンは「居場所」という表現こそしていないものの、彼が用いた“適所”という概念は、“自分にとってふさわしい場所”などの意味合いがあり、現代の用語に置き換えればおそらく「居場所」という言葉がかなり適切であると考えることができる。したがって、「居場所」と「アイデンティティ」の関係性については、先行論文からも十分に示唆のあるところと言える。しかし、本研究においては「居場所」の心理的機能という概念と「アイデンティティの確立」との関係性を見ているという点で、先行研究とは幾分異なった考察をする必要がある。

Point1についてだが、これは「自己肯定感」の心理的機能と「アイデンティティの確立」の関係性を示唆するものである。そもそも本研究において「自己肯定感」因子を構成する項目は、「(ア) 自分はうまくやれる」「(イ) 自分の能力を発揮できる」「(ウ) 自分に自信が持てる」「(エ) 何かに夢中になれる」の4項目からなっている。「居場所」と感じる場所で、(ア) (イ) (ウ) のような感覚を持つことができるということは、「家族のいる居場所」では家族成員と、「家族以外の人々のいる居場所」では家族以外の人々との間で、その人は対人関係的な“有能感”や“自信”を少なからず持っていると考えることができる。本研究においては、「居場所」を一緒にいる人の違いによって「自分1人の居場所」、「家族のいる居場所」、「家族以外の人々のいる居場所」の3分類にしたことは先述した。「家族のいる居場所」や「家族以外の人々のいる居場所」のような自分以外の人がいる「居場所」では、対人関係的な文脈で“有能感”や“自信”を感じることができる可能性があるが、「自分1人の居場所」ではどうだろうか。「自分1人の居場所」では、自分以外の人がないので、対人関係的な文脈で“有能感”や“自信”を感じることができる可能性は極めて低い。しかしそのような自分1人の状況においても、他者の目を気にせず自分の好きに、自由に振舞えるなどの理由から「自分はうまくやれる」や「何かに夢中になれる」というような感覚を持つことは決して不可能ではない。このような自分1人しかいない場合においても、その人の主観ではあるが、自分についての「自己肯定感」は持つことができる

と考える。

以上のことから本研究の「居場所」という観点から「自己肯定感」の4項目を見てみた場合に、以下の2つの異なる「自己肯定感」の概念が包含されると考えられる。その2つとは（i）被調査者自身の主観的な自分についての「自己肯定感」、（ii）「居場所」にいる人との関係性を含んだ社会的自分についての「自己肯定感」である。つまり本研究において、「自己肯定感」を構成する4項目の得点が高いということは、上記の（i）主観的な自分自身と（ii）社会的自分が、双方満足できるような状態にあるということを意味する。アイデンティティの感覚が“内的なまとまりを持った主観的自分自身”と“社会的自分”との関係性に関係しているというErikson³⁵の指摘を考慮に入れれば、本研究において第VI因子として現れた「自己肯定感」という「居場所」の心理的機能が、「アイデンティティの確立」と高い関係性があるということは、最もなことである。以上のような理由から、「自己肯定感」と「アイデンティティ確立」の関係性は説明できる。

Point2についてだが、この考察には「自然体」の心理的機能と「アイデンティティ」との関連を示唆する文献Erikson³⁶（1959）を参考にできる。Eriksonはアイデンティティの感覚を得ることについて、「こうして生きている自分を、意識、主観としての自分も、他者も、納得して受け入れているという実感を得ることである」と述べている。そしてそのアイデンティティの感覚を得るためには、「自分が自分であることを、他者から承認され、自分も納得して受け入れることが出来る「居場所」を得ることである」と述べている。このEriksonの考え方を受けて、小沢³⁷（2004）は、“自分自身を納得して受け入れられる居場所の存在が、アイデンティティの感覚につながる”と結論付けている。この観点から「自然体」因子を構成する項目を検討してみると、いずれも“本当の自分”や“素の自分”でいられるといういわば“自然に振舞える自分自身を肯定的に捉えている意味合い”の項目であることがわかる。「安心する」に関しては、やや他の項目とは色合いが違うが、自身を肯定的に捉えることができているという心理状況を考慮すれば、内容的に整合性の取れている項目である。「居場所」において“本当の自分”や“素の自分”でいられるというのは、その「居場所」において、その人自身が認識している自分自身（意識や主観）と、実際にその場で表現されている自分自身（周りからみられている自分）とが一致している状態であると考えることができ、この状態においては、その人は自分自身を納得して受け入れている状態であると考えられる。つまり「居場所」において「自然体」の心理的機能の因子得点が高い状態であるということは、“自分自身を納得して受け入れられる場所がある”という意味で、その人のアイデンティティ確立に寄与する可能性があると考えられる。

Point3についてだが、これは「思考・内省」の心理的機能と「アイデンティティ確立」との関係性を示唆するものである。「アイデンティティの確立」という問題は、Erikson³⁸が青年期の発達課題にも挙げているように、無視して通り過ぎることはできない問題である。ともすれば、アイデンティティの感覚というものは、“自分自身について（自分とは何か）”や“自分と周囲の関係について”などを、じっくりと自分自身の中で考慮し、内省をしていく中で確立されていく部分も大きいと考えられ

る。本研究における「思考・内省」という心理的機能は、「物思いにふける」「自分のことについてよく考える」「1日のことについてよく考える」「ポーっと考え込むことがある」「寝ることができる」という5項目で構成されており、「寝る事ができる」以外の4項目に関しては、自己やその他のことについて考えるという内容になっている。つまり本研究において、「思考・内省」の心理的機能の因子得点が高いということは、その「居場所」が、落ち着いて、じっくりと“思考・内省”できる場であるということを示しており、結果的にはその人自身のアイデンティティの感覚を明確にしたり、その人のアイデンティティの確立に影響を与えるという可能性が十分に考えられる。このような理由から、「思考・内省」の心理的機能と「アイデンティティ確立」の関係性が説明できると思われる。

***本調査結果『③「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×SDS得点の重回帰分析（「自分1人の居場所」を選択した44名のみ）の考察』から、『⑧：「居場所」の心理的機能尺度各因子得点×アイデンティティ確立尺度得点の重回帰分析（「家族以外の人がいる居場所」を選択した109名のみ）の考察』までは、原稿の掲載上、考察を割愛させて頂く。詳しい考察については、平成19年度文学研究科教育学専攻の修士論文（創価大学中央図書館所蔵）を参照して頂きたい。**

(2) 分散分析の考察

⑨：「居場所分類」による各「居場所」の心理的機能、特徴についての考察

(i) 「自分1人いる居場所」の心理的機能について

「自分1人の居場所」は文字通り自分以外の誰もいない、静かな静的な「居場所」と考えることができる。この「居場所」では「思考・内省」、「行動の自由」、「他者からの自由」の心理的機能が高くなっている。「思考・内省」は、誰からも邪魔されず、静かな場所で自分の時間を持つことによって、物思いにふけたり、ポーっとしたり、自分のことについてよく考えたりできるということである。「行動の自由」は、「自分1人の居場所」という、自分だけが所属・管理できる空間にいることによって、その空間で自分の好きなように出来たり、自由に好きなことができるということである。「他者からの自由」は、「自分1人の居場所」という、他者の目を一切気にせず、また他者に一切気兼ねする必要のない空間において、人を気にせず自分のペースで自由に振舞えるということである。

以上の「自分1人の居場所」において因子得点が高い心理的機能に対して、「被受容感」、「自己肯定感」、「高揚感」の心理的機能は低くなっている。「被受容感」に関しては、自分1人しかいない「居場所」においては、他者の存在がないため“受け入れられている”という感じがないことも理解できる。ただ「自己肯定感」や「高揚感」の心理的機能が低いというのはいかなる理由からなのだろうか。それを以下で考察してみる。

まず「自己肯定感」に関してだが、この心理的機能が低いということは、被調査者は、自分の能力や自分への自信というものは、他者の存在を通して獲得されるものであると考えた可能性が高い。後述する面接調査からは、「自信に関係するのは友達がいる場だとか、クラブの環境」という発言や「何

かできたとして、それを見ている人がいて初めて自信に繋がる」という発言が得られており、この考え方の正当性が裏付けられている。したがって、自分の能力や自分への自信をより安定的に確立するためには、独り善がりになってしまう「自分1人の居場所」よりも、やはり客観的な評価基準である「他者が存在する居場所」の方が適していると考えることができる。

次に「高揚感」に関してだが、「自分1人の居場所」においてこの心理的機能が低くなっている要因として、大きく2つの理由が考えられる。まず1つ目は“真の意味での”面白さや楽しさは、他者がいる場所でなければ得られないという可能性。2つ目は、そもそも被調査者が「自分1人の居場所」におもしろさ、楽しさなどの“気分の高揚”を求めているという可能性である。面接調査からも「1人で楽しいっていうのはあんまり感じない」という発言が得られており、そういう意味でも、他者の存在のない「自分1人の居場所」は、楽しさ・面白さを他者と共有し、より高い感情に高めていくような場所ではないと考えられる。2つ目の被調査者がそもそも“気分の高揚”を求めている可能性についてだが、これに関しては、被調査者にとって「自分1人の居場所」は、楽しさなどの積極的な感情を求める場所というよりも、社会や他人からの喧騒から逃れて、落ちつき、安心感のような静的な感情を求める場所であるという考え方が背景にある（詳細は次章）。「自分1人の居場所」は、積極的に気持ちを高ぶらせるという場としての意味よりも、騒々しい外界の刺激を一時シャットアウトするための、いわば“シェルター”的な意味合いが強いといえる。

(ii) 「家族のいる居場所」の心理的機能について

まず「家族のいる居場所」で高い得点を得た心理的機能は「被受容感」、「自然体」、「高揚感」である。「被受容感」に関しては、やはり家族という血の繋がった一番身近な存在の家族員が同じ場所にいることで、最終的には“どんな自分も受け入れてくれる”“自分のことを理解してくれる”“ひとりじゃない”などの感覚が生起しやすいと考えられる。

「自然体」に関しても、家族という血の繋がった身近な存在がいることで、安心もするし、何よりも気兼ねや遠慮なく、“本当の自分でいられる”という感覚や“自分らしくいられる”という感覚が得られやすいのではないかと考えられる。

「高揚感」に関しては、後述する面接調査結果のKJ法分類から「一家団欒」というラベルが抽出されており、やはり楽しみなどを共有してくれる家族の存在があるということが大きく関係しているようである。このように、「家族のいる居場所」で高い心理的機能は、自分1人ではない他者の存在があるということと、その“存在する他者”が“気兼ねなく遠慮をする必要のない家族”という身近な存在であるということが大きく関与している。

以上の「家族のいる居場所」で高く満たされている心理的機能に対して、「思考・内省」や「自己肯定感」の心理的機能は低くなっている。まず「思考・内省」に関してだが、これに関しては大きく2つのことが考えられる。まず1つ目は、家族という存在がいることによって、それが邪魔となり落ち

着いて、静かに考え事ができないというネガティブな意味合いの可能性である。2つ目は、家族という相談相手がいることによって、自分自身で深刻に考えたり、悩んだりする必要がなくなるというポジティブな意味合いの可能性である。

質問紙調査のみではこのどちらかを特定することはできなかったが、面接調査の結果も考慮に入ると、双方の可能性が包含されていると考えられた。

次に「自己肯定感」に関してだが、これに関しては、面接調査からの2つの発言を参考に考察する。まず1つ目の発言は「自信は他者と接する中でのみ生まれる」というものである。この発言は、家族成員よりも第三者である他者と接する際に自信は生まれやすいことを示唆している。この発言からは、家族成員の評価よりも、完全に第三者からの評価の方が、自らの能力を確認できたり、自信を確かめられたりする可能性があることが示唆される。次に2つ目の発言は「今いる場所で頑張ることが一番大事なんじゃないかなって思います。あんまり居場所は関係ない」というものである。この発言から、自分自身がやれるという感覚や自己への自信は、自分自身の努力や営みによって獲得できると考えている人がいることが示唆された。どの場所にいたとしても、とにかく自分が精一杯頑張ることが自信や自己肯定感につながるという考え方である。このような考え方においては、「居場所」と自信や自己肯定感の関係性は見られない。

以上、「家族のいる居場所」の心理的機能の特徴について考察してきたが、「家族のいる居場所」は、一言で言えば「どんな自分でも受容され、他者の存在がありながらも気兼ねなく振舞える居場所」と言える。そういう意味では「家族のいる居場所」という「居場所」は、支えてくれたり、応援してくれる他者が存在するという“気持ちを高めさせてくれる部分”と、そこでは気を使わずに振舞えて気持ちが楽になるという“気持ちを落ち着かせてくれる部分”の2つの要素をもった場所と考えられる。

(iii) 「家族以外の人のある居場所」の心理的機能について

「家族以外の人のある居場所」で高い尺度得点を得た心理的機能は「被受容感」、「自己肯定感」、「高揚感」である。「被受容感」、「高揚感」に関しては、「家族のいる居場所」と同様に、自分以外の他者の存在があるという要因が絡んでくると考えられる。

実際に大学生という年代を考えてみると、親やきょうだいに受け入れてもらいたいとか、一緒に楽しみたいというよりも、同年代の仲間たちから受け入れられ、楽しみを共有する方が一般的であると考えることができる。大学生という年代は、発達段階的に考えても、家族以外の仲間や恋人などの異性を求めることが自然であり、「家族以外の居場所」を「居場所」として選択する可能性が高いと考えられる³⁹⁾。家族以外の人のある場所が「居場所」と感じられている人は、それらの家族ではない人々との関係性を上手く結べている人である。「自己肯定感」に関して、第三者からの評価の方が、自らの能力を確認できたり、自信を確かめられたりする可能性がある。加えて、本研究においてはクラブやサークルを「家族以外の人のある居場所」に選んだ被調査者が多かった。このような1つの目標を

持った目標達成的な集団の構成員となることによって、日々の修練や達成経験を通して、より自分の能力や自分への自信を確認、獲得できる部分も大きかったと考えることができる。

以上の「家族以外の人がいる居場所」で因子得点が高い心理的機能に対して、「自然体」、「思考・内省」、「行動の自由」、「他者からの自由」の心理的機能は低くなっている。これらに共通する要因として考えられるのは、やはり、赤の他人と同じ空間や時間を共有している、場合によっては共有せざるを得ないという事実である。いくら同じ目的などを持った親密な関係性があったとしても、最終的には他人であり、何でもありというわけにはいかず、「自然体」でいられなくなる場面がでてくる。また、クラブなどの活動がメインの「居場所」であれば、1人でじっくり物事を考える時間など物理的に存在しないだろうし、もし時間が確保できたとしてもすぐ傍に他者の存在があるので、思索にふけっている場合ではないだろう。「家族以外の人がいる居場所」は基本的には“社会的な場所”であることが多いと考えられるので、当然そこにはルールや規範などがあり、そういう意味では「行動の自由」など下手をすればまったく保証されない可能性がある。「他者からの自由」は、「家族以外の人といる居場所」が1人ではない以上、そもそも他者からは自由ではないし、そばにいる人が他人という状況では、とりわけ、その人たちのことを全く考えずに自由に行動するということが不可能に近い。

以上、「家族以外の人がいる居場所」の心理的機能の特徴について考察してきたが、この「居場所」に関しては、とても重要なアンビバレントな2つの性質を孕んでいると考えることができる。1つは、親密な他者によってこそ味わえる、最高の「高揚感」や「自己肯定感」といった動的でポジティブなエネルギーをそこにいる人に感じさせる機能。もう1つは、他者の存在やルールなどの社会的制約によって奪われる「行動の自由」「他者からの自由」や「自然体」の自分でいられなくなるという、いわばエネルギーを消耗させる可能性が高い部分である。面接調査から、「自分1人の居場所」に関しては、「外から帰ってきて、一番癒される場所として、今の部屋があるかなって思います」や「外にいと周りの事をすごい考えてしまうので、(アパートは)素の自分になれる場所です」などの発言が得られ、「家族以外の人がいる場所」がエネルギーを消耗させる様子と、「自分1人の居場所」がうまく安息の場所として機能している様子が示されている。また、「家族のいる居場所」に関しても、「家にいる時間は、大学のことは忘れてリラックスしたい」や「居間は一日のことを忘れて家族と共に過ごす安心できる空間」という発言が得られており、「家族以外の人がいる場所」がエネルギーを消耗させる様子と、「家族といる居場所」がうまく安息の場所として機能している様子が示されている。

以上から、このような「家族以外の人がいる場所」での消耗を癒してくれるのが、「自分1人のいる居場所」であったり、「家族のいる居場所」であると考えることができ、各々の特徴が異なる「居場所」をうまく組み合わせて活用することによって、人々の精神的健康を安定させる効果がある可能性が示唆された。

(3) 「居場所」がないと答えた被調査者の調査結果に対する考察

(i) 「居場所」がない被調査者の特徴について

本研究において「居場所」がないと回答した被調査者10名のフェイスシートから理解できる特徴について考察する。

第一に、サークル所属に関してだが、これに関しては10名中8名が所属していると回答している。したがって、これらの被調査者は、サークルという場所を「居場所」候補としては持ちながらも、そこを「居場所」として感じられていない人々ということになる。これらの被調査者はサークル内の人間関係等が上手くいっておらず、サークルがあるにもかかわらずそこが「居場所」とはなっていない可能性が示唆される。

第二に、住まいの形態に関してだが、これに関しては10名中8名が「アパート」と回答している。アパートでは1人暮らしのため、これらの被調査者は有事の場合でも“他者からの援助”を受けにくい、いわばソーシャルサポートが乏しい状況にある可能性が高い。「居場所」がない人々は、大学関係組織や外部組織にも一切「居場所」が見出せていない場合が多く、住居も1人暮らしの「アパート」に住んでいる人が大半ということで、援助資源が乏しく、孤立する可能性が極めて高いという特徴がある。

第三に、「何でも話せる家族の存在」についてである。「居場所」がないと回答した被調査者10名の中で、「何でも話せる家族の存在」がないと回答した被調査者は、半数の5名であった。この数字は、もし何か困った事があった場合に、家族に相談できない可能性がある人が50%いるということを示している。この数値は「居場所」があると回答した被調査者の数値よりかなり高い値となっている。

(ii) 「居場所」がない被調査者が「居場所」に対して望む心理的機能について

「居場所」がない人が「居場所」に対して望む心理的機能は、大きく因子Ⅰ「被受容感」、因子Ⅱ「自然体」、因子Ⅲ「思考・内省」の3つである。因子Ⅶ「高揚感」や因子Ⅵ「自己肯定感」はこれらの因子より得点が低く、求められる「居場所」の心理的機能としては4番手、5番手につけている。このことから、「居場所」がない状態の被調査者においては、「居場所」に楽しさや自信をつけるという心理的機能を望むより前に、一緒にいる誰かに「受け入れてもらうこと」や「大切にされること」、「悩みを聞いてもらうこと」などを強く望んでいるという現実が見えてくる。加えて、その誰かと一緒にいる場所でも「自分らしくいられる」ことや「無理をしないでいられる」ことも強く望んでいることがわかる。そして、その「居場所」で、「物思いにふけったり」「自分のことを考えたり」することも望んでいるようである。つまりこれらのことから、「居場所」がない状態の人々は、何かワクワクし、楽しさあふれるようなアクティブな「居場所」を求めているというよりも、まずは、自分を受け止めてくれる人がいて、そこでは自分らしくいられて、じっくりいろいろなことを考えることができるような、いわば落ち着いた、「受容的で静的な居場所」を求めている傾向があることが示された。

(iii) 「居場所」がないと回答した被調査者の調査結果に対してのまとめ

以上の (i) (ii) のことから、「居場所」のない被調査者は、社会的な援助資源が少なく、他者からの援助を受けられる機会が少ないという特徴がある。また、実の家族に対しても何でも話せるわけではない関係性の人が多く、そういう意味では「孤立」する可能性が高い人々である。これらの人々は、大学に関係する場所に「家族以外の人がいる居場所」を望む傾向が高く、その「居場所」には主に、「被受容感」、「自然体」、「思考・内省」の心理的機能を求めている。ただ、「居場所」に望む心理的機能の水準は、決して高いものではなく、むしろ実際に「家族以外の人という居場所」を「居場所」を感じている人の水準よりも低いものになっている。この点からは、外部からの某かの援助によって、「居場所」がない人が「家族以外の人という居場所」を少しでも「居場所」と感じてくれるようになれば、自然と彼らが求めている以上の心理的機能をその「居場所」から得ることができる可能性は高いと思われる。とはいえ、実際にいきなり「家族以外の人という居場所」を「居場所」と感じてもらうことは難しいと思われるので、まずはアクティブ、アグレッシブに働きかけていくというよりも、「受け入れる」、「話を聴く」といった受容的な関わりを通して、「居場所」づくりのエネルギーやきっかけを与えるのが適切かと思われる。後に詳述するインタビュー調査からは、「相談をするならば、問題に関係ない人の方がいい」という意見も出ており、話を聴く役割として、大学側が用意した第三者が役に立つ可能性は十二分に期待できるところである。現存の学生相談室という正式な援助資源に加えて、各部活やクラブごとに、アドバイスや指導をするのではなく、受容的に話を聴くことができる同年代のメンタルサポーターのような人を配置するという手段もあるかもしれない。

「居場所」がない被調査者は、抑うつ度も高く、アイデンティティ確立も低くなっているという点で、援助するに値する人々であることは本研究においても示された。あとは、これらの人々をいかにして援助ルートに乗せ、適切な援助を行っていくのか。その効果的な方法を考えることが、早急に援助機関側には求められているように思われる。

IV. 面接調査

1. 目的

第3章の分析からは、「居場所」があると回答した被調査者の「居場所」の心理的機能と精神的健康の関係性を統計的な傾向として把握することができたが、その傾向性から漏れる被調査者に対する考察をすることが難しかった。このように、統計的な傾向性から外れた、いわば統計的結果からは矛盾するような被調査者の現状を把握することが、面接調査の1つ目の目的である。例えば、「自分1人の居場所」という統計的には「抑うつ度」が高い被調査者が多く存在する「居場所」において、「抑うつ度」が高くないでいられる要因は何なのか、その人にとって「自分1人の居場所」とはどういう意味のある「居場所」なのかなどについて面接調査によって探ることを目的とする。

次に目的の2つ目としては、統計的な傾向性を裏付ける、または肉付けするような被調査者の生の意見を拾い上げるということである。例えば、「家族といる居場所」においては、「高揚感」の心理的機能得点が高い被調査者は、SDS得点が低いという関係性が有意に見られているが、質問紙調査のみでは、実際に被調査者が「どうしたら家族という居場所で高揚感を感じることができるのか」や「家族といる居場所において高揚感を感じるときはどのようなときか」というような情報を収集することはできない。「居場所」の心理的機能と精神的健康の関係性を統計的分析によって検討した上で、実際にその精神的健康の向上に寄与する関係性を創出するような援助を行うにはどうすればよいのかという、具体的なヒントを探すということが、面接調査の第2の目的となる。

第3の目的は、大学生版「居場所」の心理的機能尺度という尺度では測れない部分の被調査者の「居場所」に対する考え方やニーズを知るということである。本研究においては、「居場所」の心理的機能という概念を「居場所」と関係する代表的な概念として捉え、論を進めてきたが、被調査者の意見によってはこの概念の限界が見えたり、反対に、この概念の強みを確認できる可能性がある。「居場所」の心理的機能という概念を提起した杉本・庄司⁴⁰（2006）の先行研究においては、面接調査などから被調査者の意見を拾うような、質的なデータによる検討はなされておらず、その点からも本研究から「居場所」の心理的機能という概念に対して、新たなベクトルからの示唆ができれば、それも本研究の1つの大きな意義となると思われる。

本研究では、面接方法として半構造化面接を実施する。この方法を用いる大きな理由として、本研究における面接調査は、統計的分析からの仮説検証に関わる情報と同時に、「居場所」という概念にまつわる様々な情報を探索的に収集したいという目的があるからである。「居場所」の心理的機能という概念が定着した概念ではない現在においては、この概念自体の意味を探索しやすいという点でも半構造化面接という手法を用いることが適当と考え、本研究においては半構造化面接の手法を用いることとした。

2. 方法

質問紙有効回答者の中から面接対象者を選抜し、「居場所」に関する半構造化面接を行う。以下、面接対象者の選抜方法、調査の実施方法、質問項目などを説明する。ここでは、本調査で質問紙調査に協力いただいた「被調査者」との混同を避けるため、半構造化面接を行った者は「面接対象者」と呼ぶことにする。

【面接対象者の選抜方法と群分け】

面接調査における対象者の選定条件は以下の2つであった。

①福田・小林⁴¹（1983）の日本語版SDS得点のHigh群（以下H群）、Low群（以下L群）。②上記の①の基準に該当する中で「自分1人の居場所」もしくは「家族のいる居場所」を選択した面接対象者。

①に関しては、SDS得点の平均点から±1SDを群分けの基準値とし、SDS得点50点以上をH群、34点以下をL群と定め調査依頼をした（SDS平均点42.307、SD=7.309）。②に関しては、「居場所」の心理的機能の特徴が著しく異なる「自分1人の居場所」と「家族という居場所」の比較をする意味で、この2群から面接対象者を選抜し調査依頼をした。

以上の2つの選抜基準から、本面接調査において抽出される面接対象者の群分けは、以下のような4群から構成された。

	SDS得点 H群	SDS得点 L群
自分1人の居場所	(i) 3名	(ii) 2名
家族という居場所	(iii) 3名	(iv) 3名

抽出基準への該当者や調査月日の都合などから、上記の4群の各群に対して、各々3名ずつ調査依頼を出し調査をお願いした。(ii)群に関しては「平均点-1SD」という基準で選抜を行った結果、協力いただける対象者が1人もいなかったため、34点以下という基準を緩和し、SDS得点が35点、36点の対象者にも面接依頼をし、2名のご協力をいただいた。

(iii)群に関しても、「平均点+1SD」という基準で抽出を行った結果、協力いただける対象者が1名しかいなかったため、50点以上という基準を緩和して、SDS得点48点、47点の対象者にも面接依頼をし、都合3名のご協力をいただくことができた。

(1) 実施期日

2007年11月16日～12月7日

(2) 調査方法

・実施法

初めに、話の内容は外部に漏れないこと、中止を希望すればいつでも中止できることを面接対象者口頭で伝え、ICレコーダーに記録することを了承してもらい半構造化面接を行った。実施時間は45分～75分程度であった。面接実施場所は、全面接対象者に対して心理教育相談室の同じ一室を用い、面接環境による回答への影響を極力小さくするよう心がけた。

・質問項目の内容

事前に行なった質問紙調査の回答をもとに、面接対象者が現在一番「居場所」と感じている場所について、大きく13項目の質問を行った。その質問項目の主旨を以下に簡単に示す。

●半構造化面接質問項目概要

Q1：なぜその「居場所」を一番の「居場所」に選んだのか

Q1'：具体的な「居場所」について

- Q2: 「居場所」の意味について
- Q3: 「居場所」に対する満足度 (1~10点)
- Q4: 「居場所」の重要度 (1~10点)
- Q5: 「居場所」において気分が盛り上がる時について
- Q6: 「居場所」において気分が沈む時&そのときの対処法、望む援助について
- Q7: 「居場所」において楽しい時と楽しくない時のどちらが多いのかについて
- Q8: 今の「居場所」がさらに良いものになるための条件について
- Q8': 「居場所」が望むように変化したら何かよいことがあるかどうか
- Q9: 「居場所」にいてことで“主体性”や“自信”が培われるかどうか
- Q10: 「居場所」の有無と精神的健康の関係性について
- Q11: 予め用意された場所を「居場所」と感じるができるかどうか

(3) 分析方法

面接調査の逐語記録の発話データをKJ法^{42, 43}に準じた方法で分類し分析を行う。また順次、逐語記録からのデータも取り入れ考察する。KJ法による分類は、大学院において臨床心理学を専攻する大学院生3名によって行われた。

3. 結果と考察

(1) KJ法の分析結果と考察

「自分1人の居場所」と「家族といる居場所」の特徴を明らかにするために、半構造化面接で11名が語った発言内容について逐語記録を起こした。そして逐語記録を大学院生3名によってKJ法に準じて分析をし、分類項目を抽出した。なお、KJ法を実施するに当たっては、「自分1人の居場所」を選んだ面接対象者群の逐語記録、「家族といる居場所」を選んだ面接対象者群の逐語記録という分け方で分析をすることで、異なる質問項目に対して面接対象者が同じ内容を回答したとしても、1つの分類項目にまとめられるよう配慮した。したがって、本分析においては、「このような質問に対してはこういう種類の答えである」という質問ごとの細かな分類ではなく、「この居場所を選んだ人は「居場所」に関わるこういう発言を見せている」という「居場所」の分類ごとに発言内容の項目がわかるようにしてある。このような分類をすることによって、先述の「自分1人の居場所」と「家族といる居場所」のもつ特徴をより具体的に明確化できると考えている。

【表12】「自分1人の居場所」選択者の逐語記録KJ法分析結果

大ラベル	小ラベル	代表的な回答内容例
(1) 精神的安定	①安心・落ち着く ②素直・素でいられる ③エネルギー回復場所 ④帰れる場所・基地	①「今自分の家にいるとやっぱり落ち着くし、安心感もあるし ②「1人の居場所はありのままでいられるというか ③「エネルギーとか全部を充電する場所だって思ってますね ④「自宅アパートは基地みたいな感じですね
(2) 自由に好きなことができる	①自由にできる ②思考・計画 ③部屋へのアプローチ ④娯楽 ⑤1人での気分転換	①「自分の好きな事ができるというか、自由なことが出来る場所が自分にとって大切というか ②「考え事するのは家が一番多いと思うんですけど ③「自分の空間を好きに作れてるっていうのはそれで幸せというか ④「テレビ見たりとか、いろんな音楽聴いたりとか、 ⑤「気晴らしは音楽聴いたりとか、テレビ見たりとか、お風呂はいたりとか。
(3) 1人の居場所ネガティブ要因	①居場所の嫌なところ ②ゆううつ ③寂しさ・孤独感 ④1人では楽しさは感じない	①「なんか部屋が汚いことは嫌なんですよ ②「目覚めが悪いんですよ。そんな時は憂うつですね ③「やっぱり1人でいて寂しいっていうときもあるんですよ ④「1人で楽しいっていうのはあんまり感じない
(4) 対人関係回避	①1人になりたい ②人がいない場所がない ③学校内でのシェルター ④回避的パーソナリティ ⑤人といると疲れる	①「どちらかというとなら1人でのいることのほうが好きなので ②「大学の中で1人になれる場所を探すっていうと、本当にないなあと思って ③「大学内のある場所は、私の隠れ家的というか、誰にも気付かれないので ④「人ごみとかがあんまり好きじゃなくて（中略）人の目が気にならなくて、自由に振舞える1人の場所が一番好きですね ⑤「ずっと誰か人といると、疲れちゃうっていうか
(5) 自戒・自責	①自戒・自責	①「（1人のアパートだと）空しさを感じるというか。ずっとテレビを見続けてるとかしてていいんだろうかって思ったときとかに、もっとやるべきことあるんじゃないかとか自己嫌悪っていうか。もっと頑張れよみたいな風になったりしますね。
(6) 対人接触欲求	①人と話したい ②話を聞いて欲しい	①「普通にアパートで友達としゃべってるだけでも楽しいなあって思いますね ②「話を聞いてくれるだけで気持ちがスッキリするというか、別にアドバイスはもらわなくても、話をするだけでスッキリする事が私は多いので、ただ聞いて欲しい
(7) 他者との関わり	①団結・絆・つながり ②他者との気分転換 ③援助資源がある	①「部活だったら一緒に練習をすとか、同じ目標に向かって頑張っていく事とか、同じ時間を共有してるってことで、団結をみました。 ②「皆と遊びに行くっていうのがすごい（気分を）紛らわせますね。 ③「本当に大変な時は話せる人がいるので。
(8) 居場所に対する物理的希望	①居場所に対する物理的希望	①「もう少し部屋が広がったりとか、もう少し綺麗だったりとか、テレビ、あのDVDとかあれば、あとゲームとかあればなあって。
(9) 居場所での両価的思い	①居場所での両価的思い	①「1人でいるのは好きではあるけれど、1人でいすぎても寂しいなあと思うときはある ①「誰の目も気にしないで生きていけるようになったらどんだダメな生活を始めてしまうだろうし。
(10) 楽観的思考	①楽観的思考	①「基本は寝て、起きたらなんとなんとなん大丈夫というか、楽観的というか。
(11) 居場所は意識せずともある	①居場所は意識せずともある	①「重要とか重要じゃないっていう問題で居場所を捉えたことはないっていうことかもしれません。（空気がみたいな存在）
(12) 自信がつく要因	①自信がつく要因	①「何かできたとして、それを見ている人がいて初めて自信になるのかなあって思います。 ①「必要とされている感じがあると、自分の存在価値というかが認められて（自信に繋がる）っていうことですかね。

(13) 居場所になる条件	①居場所になるには自己努力（選択）が必要 ②周りの人（環境）がよければ居場所になる	①「自分で探するのが居場所だと思います ②「最初は興味ない場所みたいになって、でもなんか人がよかったですりとか、環境がよかったですりとかしたらああ結構いいかもって後で思えて、最終的には大好きな場所になり得る
(14) 面接対象者周辺情報	①周辺情報 ②特に居場所となっている場所 ③真剣な居場所選び ④第2、第3の居場所	①「高校生の時の友達は1人しかいないんですけど ②「一番生活してる割合が布団の上が一番多いです ③「アパート選びは10個くらいの候補から、最終的に安くて、光ファイバー通ってて、一番上の階みたいな条件の場所を選びました ④「あとは「家族」ですし、他は「バイト」とか、「ゼミ」とか

【表13】 「家族という居場所」 選択者の逐語記録KJ法分析結果

大ラベル	小ラベル	代表的な回答内容例
(1) 精神的安定	①安心・ほっとする ②落ち着く ③家族が存在してくれるだけで満足 ④家ではオフ ⑤自然体・自分らしさ ⑥後押ししてくれる原動力	①「周りには家族がいるっていう安心感がある ②「やっぱり家族という時間が一番落ち着くし ③「話さないんですけど、その存在がいるだけで、いいなあっていうか。 ④「そういう時間（家にいる時間）は、大学のことは忘れてリラックスしたい ⑤「（家族は）自分が自分らしくいられる場かな ⑥「落ち込んだ時に帰って元気をもらえる場所みたいな
(2) 一家団楽	①家族共同の楽しみ ②一緒にご飯を食べる楽しさ ③家族食事様式 ④家族と一緒にいる時間がもっと欲しい	①「一緒にいて、笑ったり、大笑いしたり、同じ時間を過ごすこと ②「全員でそろってご飯食べたりとかしたら、幸せかなあって思いますね ③「家族とご飯食べてます。他愛のない会話をする。 ④「なんかもっと、うーん、一緒にいる時間が長くなったらいいなあって。
(3) 家族内コミュニケーション	①家族と話す ②父親について ③母親と話す ④母親のアドバイス	①「今日あったこととか、そういうのを家族とか両親とかに話すことが多いので ②「一番父親ときょうだいのことをまあ、昔から家のこととか話してたんで ③「まずは母親に話すことが多いですね ④「やっぱり人生経験が豊富なので、「そんなことはねえ、なんとかなるわよ」みたいな感じで、くれますね、アドバイス。
(4) 家族の受容感	①家族の受容感 ②家族の理解・協力	①「受け止めてもらえるんですね、家族は。 ②「自分のことやっぱ一番わかってくれてるっていうのが家族かなあって思うので ②「すごい協力してくれる。いろんなことに。
(5) 家族内の自由感	①家はいろいろそろっていい ②自分の部屋について	①「実家だったら、あったかいし、インターネットあるし ②「自分の好きな事ができるのは一番自分の部屋なんですけど
(6) 家族へのポジティブ感情	①家族へのポジティブ感情 ②家族を許せる	①「穏やかな父と母なので、私は常識がある親だとも思ってるし、やっぱり尊敬するところが違う面であるので、それで感謝の思いもあるし、とても満足しています ②「もっとこうして欲しいとかあげればあるんですけど、なんか全然許容範囲っていうか
(7) 自信・貢献感	①自信育成機能 ②役に立てている感じ	①「ありのままを受け入れてくれる場所があるっていうのは、自信につながりますよね ②「料理を作ったりだとかチャレンジすると、その喜んでもらえる時はほんとに役に立ててるかなって思いますね

(8) 家族に対する不満	①家族への不満 ②両親への不満 ③きょうだいへの不満 ④母への不満 ⑤父への不満 ⑥1人にして欲しい	①「みんな物を片付けなくて、すごい散らかってるんですね。それを見てイライラするから ②「謝っても両親に許してもらえない時は嫌ですね ③「長男と次男が7つ離れてるんですけど、その小学生と中学生がけんかしてるわけなんです（中略）それで家の中ビジーいってうるさいみたいなの。 ④「母は物事をあまり心配しないというか（中略）でもやっぱり自分がすごい不安だった時は、すごい心配して欲しいっていうのが多分あったと思うんですね ⑤「いつものことなんであれなんですけど、くどいっていうか ⑥「1人になりたいときに家族がたまに邪魔みたいな
(9) 祖父母の好悪	①祖父母宅のよさ ②祖父母への不満	①「おばあちゃんちにいると、やっぱりおばあちゃんおじいちゃんと話をしたりだとか、畑とかも一緒に行ったり、庭の草木に水を上げたりとかそういうことができるので。 ②「何度も同じ事を聞かされて、なんかいつも同じ説明をするとか
(10) 居場所のなさ・孤独感	①居場所がなかったら ②寂しさ・孤独感 ③居場所がない	①「居場所がなかったら、すごい嫌だなんて ②「後期になって、皆それぞれの部活が始まったり、アルバイトが始まってしまうので、私自身アルバイトをしていないから、さらにその孤独を感じてしまう ③「サークルに所属しているんですけど、サークルの中でもやっぱり自分の居場所をみつけられていなくて
(11) トラブル・イライラへの対処	①気分転換・イライラへの対処 ②葛藤・トラブルへの対処 ③他者からの援助	①「もしヒートアップするようだったら、席外します。自分の部屋に戻るとか。 ②「（両親がけんかしたときは）まずは仲裁というか、どっちが悪いかわからないかはとりあえず言って、自分の意見を。 ③「しんどかったりしたら、クラブの先輩に話しますかねえ。
(12) 信仰について	①信仰へのポジティブ ②信仰への反対	①「客観的に見て家族が一緒にの組織に所属できたらいいかなあ ②「祖父母は学会に入っていないので、その創大に対しての批判というか、そういう話をされてしまう
(13) 居場所になるには自己努力が必要	①自分で作るのが居場所 ②自分で見つけた場所が居場所	①「居場所と感じられるかって言うよりも、居場所にしないかわいけない環境にあるなって思って、なんか、自分で耕さないと居場所にならない。 ②「自分で探しにいったっていうのは、自分が積極的にそのメンバーの構成員として（中略）、行動を内発的にしやすい
(14) 居場所になる条件	①居場所で大事なものは人間関係 ②居場所になるには外からの働きかけも必要 ③必要とされている感じが居場所	①「居場所で重要なものは人間関係ですかね ②「触れ合う中でわかる事が多いなあっていうのを思うので、そういう場面を作ってあげれば絶対居場所は作れていく ③「居場所って言うのは、やっぱり自分が必要とされる場所な気がするんですよね
(15) 家族以外の居場所について	①第2、第3の居場所 ②家族以外の居場所の意味	①「「高校のクラブ」と「今のクラブ」とあとは「図書館」 ②「一緒に何かの活動を頑張ること ③「戦う場所って感じがするんですけど。皆で切磋琢磨する。
(16) 面接対象者周辺情報	①面接対象者個人情報 ②子どもは手伝うべし ③パーソナリティについて ④親族関係 ⑤きょうだいについて ⑥彼氏と母親	①「家族は私を含めて4人家族で、お父さん、お母さん、弟で、私なんですけど。典型的な核家族みたいな。 ②「家事は当たり前の手伝うこととかは、やらされて ③「皆でわいわいやってる場所があったとしたら、そこに入れる時もあるし、なんか入れないなって時もあるし ④「親族も仲良いんですけど。 ⑤「割ときょうだいは仲良い方だと思うんで、よく弟と話しますね ⑥「彼氏が母親にとって一番の存在であるなら、いいんじゃないかなあっていう感じですかね。

①KJ法分類から理解できる「自分1人の居場所」の特徴のまとめ

表12で示したように、「自分1人の居場所」を選択した面接対象者からは14個の分類項目が抽出された。これらの大ラベルや小ラベル、面接対象者の回答内容から見えてくる「自分1人の居場所」の特徴について、以下に簡単にまとめてみたい。

まず「自分1人の居場所」は、“対人関係が苦手”であったり“ずっと人っていると疲れてしまう”といった特性をもつ人によって、一時的な安息を求めるシェルターのような役割を果たす「居場所」として選択されやすい。そこでは他者の目を気にすることなく、自由に振舞えることで、一時的な“安心感”や“満足感”を感じることができる。しかし、他者の存在がない「居場所」であるが故のマイナスポイントもある。それは、常に“寂しさや孤独感”を感じる危険と隣り合わせの場所であるということと、長きに渡り対人的接触を断つことによって生じる自身への「これでいいのか?」という“自責の念”である。これらのネガティブ要因が生じてしまうと、「自分1人の居場所」は精神的健康を高めるような「居場所」としては機能しにくくなってしまふ。統計的分析において「自分1人の居場所」を選択した人のSDS得点が比較的高めな傾向が見られているのは、彼らのパーソナリティ要因とともに、「自分1人の居場所」が精神的健康に対して与える影響の不安定さも関係しているように思われる。

「自分1人の居場所」を選択する人は、寂しさや孤独感に対して、対人的な援助を求めたい気持ちはあるが、自ら積極的に援助を求めることはあまりなく、“待ちの姿勢”が多い。しかし、実際の援助として求めるものは、“話をしたい”、“話を聴いて欲しい”というものがほとんどであり、その点では一度外部の援助資源を得られることがあれば、すぐに気持ちは満たされる可能性がある。

「自分1人の居場所」を一番の「居場所」に選択した人の中でSDS得点が低い、いわば例外的な面接対象者は、「自分1人の居場所」以外に、「部活」や「クラブ」などの“密な人間関係がある場所”を第2、第3の「居場所」として確立しており、その点で適切な外部の援助資源が得られていると考えることができる。

「自分1人の居場所」を選んだ人に「居場所」を提供するという視点で援助を考える際には、“自分で選択できる”というポイントと“その場所の環境（人々）がよい”という2つのポイントを踏まえた上で、「居場所」提供を考える必要がある。

②KJ法分類から理解できる「家族といる居場所」の特徴のまとめ

表13で示したように、「家族といる居場所」を選択した面接対象者からは16個の分類項目が抽出された。先ほどと同様に、これらの大ラベルや小ラベル、面接対象者の回答内容から見えてくる「家族といる居場所」の特徴について、以下に簡単にまとめてみたい。

「家族といる居場所」は外の世界から離れたプライベート空間という点で、「自分1人の居場所」と同様“安心感”や“落ち着き”を感じさせる「居場所」であるのと同時に、家族という人の存在がいることによっても精神的健康によい影響を与え得る「居場所」である。「家族といる居場所」は、“安

心感”や“落ち着き”、“自然体でいられる”などの静的な側面から精神的健康にポジティブな影響を与える機能と、“楽しさ”などの動的な側面から精神的健康にポジティブな影響を与える機能を持ち合わせている「居場所」と考えることができる。特に、家族で共同できる楽しみがあったり、家族と一緒に食卓を囲むようなことから、“高揚感”を生み出す“一家団欒”は始まるとも言える。

「家族のいる居場所」は家族という存在がいることによって、“受け入れられている感覚”や“認められている感覚”を感じやすい。また、家族の一員として手伝いなどを行うことによって、自信を育むことができる場としての意味もある。このような点でも「自分1人の居場所」よりも多くの心理的機能を兼ね備えた「居場所」であると考えることができる。

しかし、家族というが故のマイナスポイントもある。それは、主に家族内の人間関係において何らかのいざこざが生じた時である。このような場合には、ストレスと同じ屋根の下にいないければならず、精神的にかなり緊迫した状況に追い込まれかねない。こうした状況を回避する“対処方略”を持っているかどうか、家族という居場所と精神的健康の関わりに影響を与える。具体的に家族内で問題が生じた際には、「自分の部屋に逃げ込む」、「友達などの第三者に相談する」という2つの“対処方略”がとられることが多いという結果が出た。したがって、「家族という居場所」において精神的健康を安定させるためには、「自分の部屋」と「相談できる第三者」の存在がかなり重要になってくることがわかった。

「家族という居場所」は様々な心理的機能を持ち、そこにいる人の精神的健康の安定に寄与する「居場所」であると考えられるが、この「居場所」の存在だけで十分とはいえない。「家族という居場所」は最終的に受け入れてもらえる、帰ることが出来る場所としての絶対的な意味を持つものであることが大事であるが、その場所を中心として、「家族以外の居場所」を外の世界に求めていくことも様々な心理的機能を満たす意味で必要である。「家族のいる居場所」を選択した人々に、「居場所」候補地を提供する際には、『そこにいる人々が受容的で、良い人間関係が築けることが予期できるような場所』という点を念頭において、設置に取り組むことが効果的であるという結果が見られた。

(2) 各面接対象者の質問項目への回答からの考察

KJ法分類による考察では主に、「自分1人の居場所」と「家族という居場所」の特徴について述べてきたが、ここでは、各面接対象者の質問項目への回答内容からKJ法の分類では捉えにくかった部分について、補足的に考察したい。

***原稿の掲載上、代表的な回答例の一覧表の掲載は割愛させていただく。面接対象者の質問項目に対する回答の一覧表については、平成19年度文学研究科教育学専攻の修士論文（創価大学中央図書館所蔵）を参照していただきたい。**

●面接調査におけるSDS得点高群と低群の差異について考察

SDS高群と低群の精神的健康の差を生じさせている要因として、ストレス状況に対する“対処方略”にここでは焦点をあてる。精神的に辛くなるような出来事が起こったとき、そして実際に精神的に辛くなってしまった時に、SDS高群と低群の面接対象者がとる“対処方略”に何らかの違いは見出せるのか。この点をここでの考察の主題とする。

①SDS高群の“対処方略”の特徴

SDS高群の“対処方略”の特徴の1つとして、「自ら積極的に外部に援助を求めない」ということがある。これは、1人目と3人目の面接対象者の発言の中に見られている。具体的には「偶然電話がかかってくる」や「友達の誘いがあれば行く」という言い方をしており、自分発信の援助要請ではない。このように他者依存・受動型の“対処方略”では、自分が本当に精神的に参った時に、自分からはどうすることもできない。そういう意味で、他者依存・受動型の“対処方略”は、非常に不安定で、不確実な“対処方略”であり、精神的に参っている状況を回復させるような安定した機能をもっているとは考えられない。

次にSDS高群の“対処方略”の2つ目の特徴として、「自分1人で解決を図ろうとする」傾向が見られる。SDS高群の対処法は、TVを見る、映画を見る、ネットをする、音楽を聴く、自分の部屋にいく etc精神的苦痛を1人で解決しようとする傾向が見られる。「自分1人で解決しよう」という姿勢は、非常に抑うつとの関連が高いことが種々の文献から示されている⁴⁴（保崎、2002 et al）。

次にSDS高群の“対処方略”の3つ目の特徴として、「家族以外の外部の人に相談する事が少ない」傾向が見られる。SDS高群の発言の中には、「家族以外の人に相談する」という“対処方略”があまり見出せなかった。その点から、外部に相談できる第三者的な人があまりいなかったり、援助資源が乏しい可能性が推測される。

②SDS低群の“対処方略”の特徴

SDS低群の“対処方略”の1つ目の特徴として、「問題を家族にぶつけることができる」環境にある人が多い傾向がある。つまり、何か家族に原因がある問題の場合は、直接家族に文句を言って解決を図ることができる可能性がある人が多い。このように意見をぶつけられる家族というのは、家族関係がよい家族である可能性が高い。実際、“家族に直接言う”と回答した面接対象者は、家族に“安心感”や“受容感”を感じている場合が多かった。

次に、SDS低群の“対処方略”の2つ目の特徴として、「家族以外の外部の人にもいざとなれば相談できる」環境にある人が多いという傾向がある。家族以外にはあまり相談しない人も家族に対してはよく相談するなど、SDS低群においては、精神的な苦痛を“相談”したり“誰かに話す”などの「言葉にして吐き出す」という“対処方略”をとる傾向が高いことが示された。

最後に補足的に付け加えると、SDS低群は「部活」や「クラブ」活動等の第2、第3の「居場所」を上手く活用している可能性が面接調査から示唆された。つまり、「家族以外の人」との接点も多く、話や相談がしやすい環境にある人がSDS低群には多いと考えられる。

③両群の“対処方略”から考えられること

SDS高群と低群の“対処方略”の違いを、筆者は以下の2つのポイントから考えたい。

まず1つ目は「援助を求める姿勢の違い」である。精神的苦痛を感じるようなことが生じた場合に、その解決を自分1人でしようとするのか、他者に手助けを求め解決しようとするのかは大きな分岐点である。本研究からは、SDS高群は援助を求める姿勢が消極的である傾向が示された。この傾向が直接SDS得点の高さに寄与することは本研究では示せないが、他者に援助を求める姿勢が、SDS得点の低減に影響を与える可能性は示唆された。

2つ目は「第三者に話して解決するという方略がとれているかどうか」である。精神的苦痛やそれに関わる問題と言っても多種多様であり、場合によっては家族には話せない問題がある。そのような時に、話を聞いてくれる適度な距離感の第三者の存在があるかどうかは、精神的健康を考える上で重要な問題である。それに加えて、“他者に話して精神的苦痛を軽減する”という考えをそもそも持っているかどうか、ということも精神的健康を考える上で重要となってくる。これは本研究の主題ではないが、非常に重要な問題である。

以上、面接調査から見てきたSDS高群・低群の“対処方略”の差異について簡単に考察した。ここから言えることは、「居場所」と精神的健康の関係を考える際には、「居場所」の心理的機能などの「居場所」側の“環境要因”に加えて、各人の精神的苦痛への“対処方略”などの“個人要因”も十分考慮に入れる必要があるということである。上記の二要因を考慮に入れた時、「居場所」というものがより総合的に捉えられるようになるだろう。

V. 総合的考察

1. 「居場所」の心理的機能と精神的健康の関係性

(1) 「居場所」の心理的機能と「SDS得点」の関係性について

第3章本調査の結果と考察では、「居場所」の心理的機能の中で「SDS得点」との関係性が予測される因子について焦点を絞り、各因子と「SDS得点」の関係性について説明してきた。しかし全体で見ると、「居場所」の心理的機能と「SDS得点」の関係性については、統計的に大きな有意差が生じるほどの関係性は見られず、「居場所」の心理的機能という概念以外に、被調査者の「SDS得点」に寄与する別の要因が存在する可能性も示唆された。本研究においては、杉本・庄司⁴⁵ (2006) や田島⁴⁶ (2000) を参考に、「居場所」の心理的機能と「抑うつ」の関係性を探索的に調査する目的で、「居

所」の心理的機能尺度得点と「SDS得点」の関係性を統計的に分析した。しかし、本研究の分析結果から、「居場所」の心理的機能と「SDS得点」の関係性について、さらに考慮すべき点が浮かび上がってきた。したがって、この節においては、本研究において、「居場所」の心理的機能と精神的健康の関係性があまり見られなかった要因について、以下の4つの考慮点から考察する。

まず1つ目は、そもそも「居場所」の心理的機能という概念と「抑うつ感」の間には関係性がなかったのではないかという問題である。杉本・庄司⁴⁷（2006）、田島⁴⁸（2000）の指摘は厳密に言うと、「居場所」のなさど「抑うつ感」の関係性を示唆したものであり、「居場所」の心理的機能と「抑うつ感」の関係性を示したものではない。本研究は探索的研究の意味合いが強かったとはいえ、「居場所」の心理的機能と「抑うつ感」の関係性の理論的背景については、もう少し慎重に押さえておくべきであった。ただ、「居場所」の心理的機能の下位尺度の中には「SDS得点」との関係性が見られているものもあるので、「居場所」の心理的機能と「抑うつ感」の関係性がまったくないと結論付けてしまうことも難しい。

次に2つ目は、「居場所」の心理的機能との関連が予測される精神的健康の指標が別にあるという可能性である。これは、「居場所」の心理的機能との関係が予測される指標として、「SDS得点」以外により適切な指標があったのではないかということである。本研究における問題点は、精神的健康の指標として「抑うつ感」以外の指標を考慮に入れなかったことである。この点に関しても、上述の1つ目の考慮点と併せて今後検討される余地がある。

次に3つ目は、被調査者の“個人要因”が「居場所」の心理的機能と「抑うつ感」の関係性に影響を与える可能性である。本研究においては、「居場所」の心理的機能という“環境要因”と「抑うつ感」の関係性のみを、研究目的に合わせて切り取って考察してきたが、面接調査の結果から、被調査者の「パーソナリティ要因」や「対処法略」も「抑うつ感」に影響を与える要因として、考慮に入れる必要があることが示唆された。したがって、今後の研究において、「居場所」の心理的機能と精神的健康の関係性を探求する際には、被調査者の“個人要因”も考慮に入れることによって、「居場所」と精神的健康の関係性の実態をより正確に把握できると考えられる。

最後に4つ目は、本研究における質問の仕方の問題である。本研究においては、便宜上第1の「居場所」のみを被調査者に尋ねたが、実際は第2、第3の「居場所」の重要性も面接調査から示された。「居場所」の心理的機能は、さまざまな「居場所」によって総合的に満たされうるものであるとされている。今後の「居場所」研究においては、第2、第3の「居場所」の存在とその心理的機能についても考慮に入れられるような研究計画が望まれる。

以上の点から、本研究の結論として、「居場所」の心理的機能と「SDS得点」の関係性については部分的に示唆されたが、その両者の根本的な部分の理論的な関係性については、今後更なる研究の蓄積が必要であると思われる。

(2) 「居場所」の心理的機能と「アイデンティティ確立得点」の関係性について

第3章本調査の結果と考察では、「居場所」の心理的機能の中で「アイデンティティ確立得点」との関係性が予測される因子について焦点を絞り、各因子と「アイデンティティ確立得点」の関係性について説明してきた。「アイデンティティ確立得点」に関しては、その全体で見ても、「SDS得点」より「居場所」の心理的機能と統計的にも有意な関係性が見られた。したがって、本研究においては、「居場所」の心理的機能と「アイデンティティ確立」の関係性はある程度示唆されたと考えることができる。「居場所」の心理的機能の中で特に「アイデンティティ確立」との関係性が強かったのは、第VI因子「自己肯定感」であった。この関係性についての詳しい考察は第3章に譲るが、「自分が役に立っている」、「うまくやれている」という感覚が持てるような「居場所」の存在は、「アイデンティティ確立」に寄与することが示された。加えて、同じ「役に立っている」という感覚でも、それを“家族”に対して感じているよりも、“家族以外の人（友達や部活仲間）”に対して感じている場合のほうが、「アイデンティティ確立」に高く寄与することが示された。

「居場所」の心理的機能と「アイデンティティ確立」の関係性については、本研究において定めた3つの分類の「居場所」によってその関係性が変わることも示された。例えば、「自分1人の居場所」を選択した44名は、「思考・内省」因子が「アイデンティティ確立」と関係性が予測されている点の特徴的である。また「家族以外の人のある居場所」を選択した109名は、「自然体」因子が「アイデンティティ確立」と関係している点の特徴的である。このように、各「居場所」分類によって、「アイデンティティ確立」に寄与する「居場所」の心理的機能が異なってくる可能性が、本研究において示された。この結果は、実に興味深いものであり、「居場所」という概念からの援助を考える際には、考慮に入れるべき問題ともなるだろう。

2. 「居場所」という観点からの効果的な援助のあり方

(1) 「居場所」がない人々に対する援助

「居場所」がない人々において懸念される点は、周囲の援助資源が乏しくなることによって生じる“寂しさ・孤独感”という精神的な苦痛と、実際に“孤立”してしまうという現象である。本研究において「居場所」がないと回答した人の多くは、決して周りに「居場所」候補がないわけではないが、周りにあるいかなる場所も「居場所」とは感じられていないという人々であった。このことから、ただ単に「居場所」候補の場所を用意するという援助を行ったとしても、その場所が「居場所」と感じてもらいやすい特徴を持ち合わせた場所でない限りは、結局用意した場所も「居場所」とは感じてもらえないという事態になってしまう。『「居場所」がない人は、精神的健康が低く援助対象となる人々であること』や、『それらの人々をいかに援助ルートに乗せ、適切な援助を行っていくのか』という点が重要であることは第3章で述べた。しかし、本研究においては、面接調査協力依頼の過程から、「居場所」がない人々と外側からコンタクトを取ることの難しさが実感された（面接調査依頼をした8名

中返信があったのは1名のみであった)。つまり「居場所」がない人々が、他者や他の機関が用意するような援助ルートには乗りにくいタイプの人々である可能性も考慮に入れなければならない。以上のことから、「居場所」がない人々に「居場所」を提供する際のポイントとして、以下の2点を挙げたいと思う。

1点目は、『現在ある「居場所」候補の中から、「居場所」と感じられるような場所を創出すること』である。「居場所」のない人々には、すでに身近な場所として存在している「部活・サークル」や「大学」などの場所を「居場所」候補として提供することを考えるのが効果的といえる。事実、本研究においては、「居場所」のない人の6割が大学に関係する場所を「居場所」であって欲しい場所として望んでおり、大学構内に「居場所」候補を創出することは効果的である裏づけが取れている。もしくは、新たな「居場所」候補を作ることはなくとも、「部活動やサークル」が「居場所」と感じられるようにその場所を改善するという方策も有効であるかもしれない。

2点目は、『「居場所」がない人々が、「居場所」に求める心理的機能を「居場所」候補の場所に充足させること』である。「居場所」がない人々は、「居場所」に対して、「受け入れて欲しい」「話を聴いて欲しい」という受容的な関わりを第一に求めている。よって「居場所」候補地には、第一にそのような機能が備わっていることが望まれる。「アドバイスをするよりもまずは話を聴くことができる人の存在」が重要となる。クラスにおいては、担任が“カウンセリングマインド”を心得ることが1つの手助けになるだろうし、部活動においても部活動の利害とは関係のない“相談役”のような存在があると有効であると思われる。“相談役”という意味では、既存の学生相談室も非常に効果的ではある。「居場所」がない人々に「居場所」という観点から援助を考える際には、まずは「話を聴いてもらえる人の存在」「話を聴いてもらえる場所」を用意し、それを意識してもらうことが重要である。実際に相談に行く・行かないは別としても、“いざという時に話せる場所がある”という考えがもてるだけで、完全な孤立からは免れる可能性が出てくる。そのような場所を、大学構内というその人にとって身近な場所に創出することが、効果的な施策と考えられる。

(2) 「居場所」はあるが「SDS得点」が高い人々に対する援助

本研究において、「居場所」はあるが「SDS得点」の高かった人の特徴として、「パーソナリティ特性」と「対処方略」の2点が重要なポイントであることは度々言及してきた。「パーソナリティ特性」に関しては、「SDS得点」が高い人の中にはやや「対人不安」的側面が見られ、人付き合いに煩わしさを感じている人が多いこと、「対処方略」に関しては、精神的苦痛を自分だけで処理しようとしたり、自分の中にしまいこんでしまう人が多いことが示された。これら2つのポイントに対して、最大公約数的に援助のポイントを考える際に浮かび上がるのは、「第2、第3の居場所」というキーワードではないだろうか。つまり、第一の「居場所」のみでは満たされない心理的機能を、他の「居場所」によって補うという考え方である。この考え方自体は、杉本・庄司⁴⁹ (2006) においても提案されている。

「居場所」はあるが「SDS得点」が高い人には大きく2つのタイプがある。まず1つ目は、「自分1人の居場所or家族という居場所」を第一の「居場所」としており、相対的に外部との接触機会が少ないタイプ。2つ目は、「家族以外の人という居場所」を第一の「居場所」としており、相対的に外部との接触機会は多いが、その中で問題を抱え精神的に苦しくなっているタイプ、である。以下では、この2つのタイプにおける援助のポイントを簡単に考えてみる。

まず「自分1人の居場所or家族という居場所」を第一の「居場所」としており、相対的に外部との接触機会が少ないタイプの人々に対しては、「第三者との安心できる交流」を提供したい。自分の部屋に閉じこもるということはその人の自己イメージを悪くする可能性があり、また社会的スキルも低下させる恐れがある。何か辛いことがあったときにそれを話せる第三者の存在を確保するためにも、自分1人や家族という身内以外の“第三者”が存在する場所を、第2の「居場所」として提供することをこのタイプの人々には考えたい。このタイプの人々の中には、第三者に援助を求めたいと思っても自分からは援助要請できない人々や、与えられた場所であってもそこにいる人（環境）がよければそこが「居場所」となる可能性は高いと回答している人が多い。これらのことから、このタイプの人々には、適度な周囲からの働きかけが有効であると思われる。ただ、「強制」となると抵抗を感じる人も少なからずいるので、例えば、形式的にはクラスや部活に所属することはある程度制度化した上で、選べる「居場所」候補としていくつかの場所を用意するような方策が適当であると思われる。ここで重要なのは、「自分1人の居場所」や「家族という居場所」では得られにくい心理的機能を、第2の「居場所」で補うという視点であり、その目的を果たすために、「クラス」や「部活」という「家族以外の人」のいる居場所を上記で例示したにすぎない。したがって、「家族以外の人」のいる居場所の心理的機能を満たす場所であれば、上記の場所以外でも「居場所」候補として提供する意義はあると考えられる。

2つ目の、「家族以外の人という居場所」を第一の「居場所」としており、相対的に外部との接触機会は多いが、その中で問題を抱え精神的に苦しくなっているタイプの人に対しては、その人を受容し、話を丁寧に聴くことができる人がいる場所を第2の「居場所」として提供することが効果的である。現在起きている「居場所」内での問題に関しては、やはり相談することによって解決がはかられることが望ましい。この点については、先述の「居場所」がない人に対する援助策と共通する部分がある。ただ「家族以外の人という居場所」を第一の「居場所」としている人の特徴としては、人と付き合うことに積極的な姿勢をもっているということが考えられ、この点は「居場所」がない人々とは異なる援助方策も有効となる可能性がある。その援助方策は「自分1人の居場所」の創出である。「家族以外の人という居場所」を選択した人々は、活動的な人が多く、常に多くの人々との関わりを持ちながら日々を過ごしていることが予想される。このような状況において、一度対人関係上のトラブル等が生じると、予想外のスピードで一氣に歯車が狂い始める可能性は高い。そのような時に、一時の“シェルター”的な役割として、「自分1人の居場所」があることは有効であると考えられる。面接調査の結

果からも、「自分1人の居場所」で精神的な落ち着きを得たり、「新たに自分を見つめなおせる」という効果も見出され、トラブルや問題が起こったときの“対処法略”の1つとして、「自分1人の居場所」に行くということの有効性が示唆されている。「居場所」の心理的機能という視点から考えても、「自分1人の居場所」は、「家族以外の人といる居場所」では得られにくい、「思考・内省」「行動の自由」「他者からの自由」という心理的機能を満たす場であり、第2の「居場所」として十分に機能する可能性はある。以上から、「家族以外の人といる居場所」を第一の「居場所」としており、相対的に外部との接触機会は多いが、その中で問題を抱え精神的に苦しくなっているタイプの人に対しては、「悩みを受容的に聴く人」の存在と「落ち着いてじっくり自分を見つめなおせる1人の場所」の双方を提供することが効果的であると考えられる。

(3)「居場所」を用意する際の全体的な留意点について

(1)、(2)では援助対象者のタイプ別に援助ポイントを見てきた。ただ全体として考えねばならない根本的な問題として、援助対象者が「居場所」と感じた場所しか「居場所」にはなり得ないという厳しい事実がある。本研究では、心理的援助として「居場所」を用意するという視点から、いかに援助対象者に「居場所」と感じてもらえる場所を提供できるかということに焦点を当ててきた。その結果、大枠の大前提としては、「受け入れてもらえること」「話を聴いてもらえること」「認めてもらえること」などのポイントが、「居場所」と感じられるかどうかにおいて非常に重要であることがわかった。この点では、カウンセリングの姿勢が「居場所」という視点においても重要であることが改めて示唆された。これらのポイントに加えて、『用意された「居場所」がどうすればより「居場所」と感じてもらえる場所になるのか』というポイントを、本研究から示し、第3節を締めくくりたい。

用意された場所が「居場所」と感じるためには、大きく①「自分で選択できた場所であること」、②「その場所の人や環境がうまく適合すること」の2点がある。②に関して言えば、どのような場所が自分に適合していると感じるかは各人によって千差万別であり、決して一括りにはできない。かといって、各人にあった「居場所」を1つ1つ創出していくわけにもいかない。したがって、②に関しては本研究において分類した、大きく3種類の性質の異なる「居場所」候補を最低限用意することが効果的であると思われる。ただ外部機関が用意するのならば「家族といる居場所」はとりあえず除外して考えてもよい。ただ少なくとも「仲間同士で楽しく、一致団結してやっていくような居場所（家族以外の人といる居場所）」と「気分を落ち着けて、じっくり自分自身や周囲を見つめなおせるような居場所（自分1人のいる居場所）」の2タイプの居場所は必要であると思われる。このような性質の異なる「居場所」候補をいくつか用意し、それらの「居場所」の中から自分の好きな場所を選択してもらえよう工夫する。その工夫によって、①の条件も満たされることになる。面接調査からは、『「居場所」を「自分で選択した」という事実が、その場所を「居場所」にしていこうというモチベーションにつながる』と意見が得られており、①の条件が「居場所」となる上で非常に重要な条件であることがわ

かる。その人に完全に適合する「居場所」候補をつくるのは困難であるという現実を考えれば、多少条件が悪くとも、ある程度はその人の自己努力に任せて『頑張って「居場所」にしてもらえらる』ような条件を満たしておくことが効果的である。

上記の2つの条件を最大公約数的な条件として「居場所」候補を複数用意した上で、そこからは、各人の「パーソナリティ」や「援助資源」などの“個人要因”を見定めながら、援助対象者により適合した「居場所」を提供していくことが望まれる。この部分についての詳細は、先述の(1)、(2)をご参照いただきたい。本研究においては、大学のような機関が「居場所」を用意し、提供することがかなりの有効性をもっている可能性が示唆された。この点は、本研究の大きな意義である。この大枠の示唆に基づき、援助対象者のタイプ別に、具体的で、詳細な援助様式や援助スタイルについて、今後更なる研究が進むことを望みたい。

3. 「居場所」の心理的機能概念と今後の課題

(1) 「居場所」の心理的機能概念に関する今後の課題

「居場所」とはいかなるものであろうか。この根本的な問いを基に「居場所」研究は行われてきた。そして社会学、教育学、心理学等の様々な学問領域から、「居場所」の意味や定義が考えられてきた。「居場所」にまつわる種々の考え方や概念の中で、「居場所」という視点から心理的援助を行う際に、有用である概念はいったい何なのか。その問いに対する筆者の1つの回答が、「居場所」の心理的機能であった。

したがって、本研究においては、「居場所」に関する概念として、「居場所」の心理的機能を取りあげて、様々な分析や考察を行ってきた。その結果、この概念が「居場所」研究において今後有意義なものになっていくであろう大きな可能性が見えたのと同時に、もう一度立ち返って考えるべき課題が見られた。

その課題とは、一言で言えば「居場所」の心理的機能概念の「曖昧さ」である。これは、「この概念自体の意味や定義が正式には確立していない」という事実と、「この概念との関連が予測される精神的健康についての理論がほとんど築かれていない」という事実に基づいている。本研究においては、「居場所」の心理的機能という概念を筆者なりの捉え方で捉えて研究を進めてきた。その結果、「居場所」の心理的機能尺度は、杉本・庄司⁵⁰（2006）の6因子構造とは異なる7因子構造になった。この点に関しては、被調査者の年齢層の違いによってある程度説明はできた。しかし、「居場所」の心理的機能という概念も、その背景に定義的な考え方や明確な理論を構築したほうが、概念としてはより信頼性・妥当性が高いものになると考えられる。この理論を構築するために今後も、「居場所」の心理的機能という概念に関して研究が重ねて行われる必要性を筆者は感じている。

本研究では、「居場所」の心理的機能自体の概念に加えて、その概念と精神的健康の関連性を明確に示せなかった。ただ、面接調査によって、「居場所」と精神的健康の関連性については確実に示された

といてよい。あとは、「居場所」の心理的機能という概念と精神的健康の概念の関係性の理論を確実に構築していく作業が求められる。

本研究においては、「居場所」の心理的機能という概念が、「居場所」という視点からの援助を考える際に、参考になる非常に有用な概念であることは示された。『「居場所」の心理的機能の中に精神的健康と関係する機能がいくつか見出されたこと』、『「居場所」の種類によって心理的機能が異なっていること』、『「居場所」の心理的機能という概念によって、人々の「居場所」に対するニーズを詳細に把握できるようになったこと』、『満たされていない「居場所」の心理的機能を補うという視点での援助が考えられるようになったこと』などなど、「居場所」の心理的機能という概念によって得られる示唆は数多い。このように、「居場所」の心理的機能という概念は非常に示唆に富む重要な概念であるので、筆者としてもこの概念に関しては本研究に続き、今後更なる研究を進めていきたいと考えている。

(2) 「居場所」という観点から援助を考える際の今後の課題

本研究においては、「居場所」という観点からの心理的援助を考える際に考慮すべきいくつかのポイントについて示してきた。代表例をあげれば、『援助対象者が「居場所」と感じることができるよう、「居場所」候補地に人々が求めている心理的機能を持たせておくこと』、『性質の異なる「居場所」候補をいくつか用意し、それを選択できるようにすること』などである。しかしながら、これらの施策提案は、“援助対象者が援助ルートに乗る”という前提に立っての指摘であり、“援助ルート”に乗らない援助対象者に対してはこの指摘は意味を成さないという問題点がある。つまり、今後の大きな課題として、「援助ルートに乗らない、もしくは乗りたがらない援助対象者に対して、どのように「居場所」という観点からの援助を考えていくのか」という、つまり「アウトリーチ」の問題があげられる。この問題に関しこの節で提案を加えることで、本論文を締めくくりたい。

援助が必要な状況にあるにもかかわらず、援助ルートに乗らない・乗ろうとしない人々はかなり多く、実際に深刻な問題に至る可能性が高いのはこのような人々である。本研究においては、『大学側が「居場所」を提供したとしても、それを実際に活用するという段階まで至らない』と考えることができる。人々が利用可能な社会的資源を活用しない理由に関して、古池⁵¹ (2004) は、以下の点を指摘している。

- ①サービスの存在に気付いていない
- ②サービスを活用する余裕がない
- ③カウンセリングの性質や目的について誤解している
- ④問題を意識したまらない
- ⑤「自分の生活は自分で面倒を見るべきだ」と考えている
- ⑥「援助専門職は自分達の生活をコントロールしようとしているのだ」と信じ込んでいる

- ⑦「提供されているサービスは文化的な違いが考慮されておらず、自分たちはサービスの対象外だ」と認識している
- ⑧「自分はサービスを受ける価値がない」と思っている

これらの指摘を考慮に入れて、本研究における大学生の援助を考える際に、特に重要と思われる援助対象群のポイントを大きく以下の3点に絞り考察をする

- (1) サービスを利用する気持ちはあるが、単にサービスの存在を知らないだけの人
- (2) サービスを利用する気持ちはあるが、実際に活用するエネルギーやスキルがない人
- (3) サービスに対して、意図的な拒絶反応や拒否反応を示す人

上記の(1)から(3)の援助対象者の特性を考慮し、彼らに対する「アウトリーチ」的な援助について考えると、最低限以下のポイントが見出せる。

- (i) 新学期に“メンタルサポートガイダンス”を開き(原則強制参加)、そこで大学側が提供している“援助資源”について詳説する。それと同時に、援助対象群をSDS等の尺度を用いてスクリーニングする。この際に“メンタルサポート”を受けることに対してどのような意見や考え方をもっているのかも尋ねておくが良い。
- (ii) “メンタルサポートガイダンス”の際に、やや講義的な要素も取り入れ、メンタルヘルスの維持に関する情報や、心理的援助についての情報などを心理教育的に享受することも予防的施策として効果が期待される。
- (iii) クラスなどの「居場所」をある程度制度として用意し、最低限学生が人間関係を持てる機会を保証する。その上で、リクリエーションや話し合いを通して、そのクラス内で仲良く付き合える友達を探せるよう配慮する。それに加えクラス担任は、受容的態度を基本として、各学生に信頼される存在としてあるよう努める。クラス担任は、いざという時に学生と大学をつなぐ架け橋の役割を果たす。
- (iv) 援助の必要性がある学生に対しては、対人関係能力を育成するような実践的なトレーニングや、メンタルヘルスに関する詳しい講座などを設け、そこに参加してもらう。このとき既に大学から足が遠のいている学生に対しては、担任に橋渡しをしてもらう。
- (v) 意図的に“援助資源”を拒否する学生に対しては、直接的な働きかけによってコンタクトを適度にとることを心がけると同時に、クラスの友達などの非公式的な交流を通してまずは人間関係の形成を試みる。これらの試みを並行して行う必要がある。また、彼らのニーズにできるだけ添うような「居場所」候補を設けておくことで、彼らが社会参加できる可能性を少しでも高めておきたい。

引用文献

- 1 田島彩子 2000 「青年期のこころの「居場所」－「居場所」感覚と抑うつ感－」 日本心理臨床学会第19回大会発表論文集、258。
- 2 堤 雅雄 2002 「「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱」 島根大学教育学部紀要、**36**、1－7。
- 3 杉本希映・庄司一子 2006 「「居場所」の心理的機能の構造とその発達の变化」 教育心理学研究、**54**、289－299。
 - 4 3に同じ
 - 5 1に同じ
 - 6 2に同じ
 - 7 3に同じ
 - 8 3に同じ
 - 9 3に同じ
- 10 中島喜代子・倉田英理子 2004 「家庭、学校、地域における子どもの居場所」 三重大学教育学部紀要 人文社会科学、**55**、65－77。
- 11 本間友巳 2006 「不登校・ひきこもりと居場所」 忠井俊明・本間友巳（編） ミネルヴァ書房 Pp.2－25。
- 12 清水秀美・今栄国晴 1981 「STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORYの日本語版（大学生用）の作成」 教育心理学研究、**29**（4）、62－67。
- 13 山本真理子・松井豊・山城由紀子 1982 「認知された自己の諸側面の構造」 教育心理学研究、**30**、64－68。
 - 14 3に同じ
 - 15 12に同じ
 - 16 13に同じ
 - 17 3に同じ
 - 18 3に同じ
 - 19 3に同じ
- 20 藤竹 暁 2000 「居場所を考える 現代のエスプリ別冊現代人の居場所」 藤竹 暁（編） 至文堂 Pp.47－57。
 - 21 11に同じ
 - 22 20に同じ
 - 23 11に同じ
 - 24 1に同じ
 - 25 2に同じ
 - 26 2に同じ
 - 27 2に同じ
 - 28 3に同じ
- 29 福田一彦・小林重雄 1983 『日本版SDS自己評価式抑うつ性尺度使用手引き』 三京房
- 30 下山晴彦 1992 「大学生のモラトリアムの下位分類の研究－アイデンティティの発達との関連で－」 教育心理学研究、**40**、121－129。
 - 31 29に同じ
 - 32 30に同じ
- 33 Erikson E.H. 1959 『Psychological Issue: Identity and the Life Cycle.』International Universities Press.
（小此木啓吾 訳編 1973 『自我同一性』 誠信書房）
- 34 小沢一仁 2000 「自己理解・アイデンティティ・居場所」 東京工芸大学工学部紀要、**23**、94－106。
 - 35 33に同じ
 - 36 33に同じ
- 37 小沢一仁 2004 「さまよえる青少年の心－発達臨床心理学的考察－」 谷 冬彦・宮下一博（編著） 北大路書房 Pp9。
 - 38 33に同じ
 - 39 33に同じ

- 40 3に同じ
- 41 29に同じ
- 42 川喜田二郎 1967 「発想法—創造性開発のために—」 中公新書
- 43 川喜田二郎 1970 「続・発想法—KJ法の展開と応用—」 中公新書
- 44 保崎秀夫 2001 「うつ病の人の気持ちがかかる本」 主婦の友社
- 45 3に同じ
- 46 1に同じ
- 47 3に同じ
- 48 1に同じ
- 49 3に同じ
- 50 3に同じ
- 51 Corey, M.S.,&Corey, G. 1998 『BECOMING A HELPER,Third Edition』 Cole Publishing Company.
(下山晴彦 監訳 2004 『心理援助の専門職として働くために』)

参考文献

- 青木 航 2002 「くつろぎからみた家族の居場所に関する研究—フラット3・4LDK住戸の場合—」 日本建築学会東海支部研究報告集、**40**、621—624。
- 浅井健史 2006 「よくわかるコミュニティ心理学」 植村勝彦・高島克子（編） ミネルヴァ書房 Pp.186—187。
- Cooper, C&Dewe, P 2004 『STRESS : A Brief History, First Edition』 Blackwell Publishing (大塚泰正・岩崎健二・高橋 修・京谷美奈子・鈴木綾子 訳 『ストレスの心理学—その歴史と展望』 北大路書房)
- 深谷昌志 2003 「学校とは何か—「居場所としての学校」の考察—」 北大路書房
- 古川奈美子・北山 修 2004 「大学生における境界例心性と親の養育態度・家族の雰囲気との関係性について」 九州大学心理学研究、**5**、207—218。
- Hans Selye 1976 『THE STRESS OF LIFE, revised edition』(杉 靖三郎・田多井吉之助・藤井尚治・竹宮 隆 訳 1988 『現代社会とストレス』 法政大学出版局)
- 黒澤英典 2006 「「居場所づくり」から「要場所づくり」へ」 練馬区地域教育力・体験活動推進協議会（共編）学文社
- 小星靖恵 2004 「居場所づくりと社会つながり」 子どもの参画情報センター（編） 萌文社 Pp.177—179
- 近藤邦夫 1994 「生徒と教師の関係づくり：学校の臨床心理学」 東京大学出版会
- 百瀬知雄 2003 「心理学辞典」 中島義明ら（編） 有斐閣 Pp.866。
- 森保洋之 2002 「子供を中心にみた住空間の計画に関する研究 その2—家族のコンタクトと子供の居場所の関係について—」 日本建築学会大会学術講演梗概集、Pp.9—10。
- 文部省中学校課 1992 「登校拒否（不登校）問題について—児童生徒の「心の居場所」づくりを目指して」（学校不適応対策調査研究協力者会議報告） 教育委員会月報、**44**、25—29
- 中村泰子 1999 「居場所の尺度作成と因子分析的研究—○△□法の基礎的研究として—」 日本心理臨床学会

- 第18回大会発表論文集、374-375。
- 二村克行 2001 「子どもは家族の中に居場所があるのかー家族福祉の力動理論的展開を目指して（総論編）ー」
山口県立大学社会福祉学部紀要、7、47-57。
- 大久保智生 2005 「青年の学校への適応感とその規定要因ー青年用適応感尺度の作成と学校別の検討ー」 教
育心理学研究、53、307-319。
- 岡村達也・加藤美智子・八巻甲一（編） 1995 「思春期の心理臨床ー学校現場に学ぶ「居場所」づくりー」 日
本評論社
- 岡本祐子（編著） 2002 「アイデンティティ生涯発達論の射程」 ミネルヴァ書房
- 奥村泰之・坂本真士 2004 「アナログ研究にBDIとSDSは有効か？」 日本社会心理学会第45回大会発表論文
集、756-757。
- 小沢一仁 2003 「居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと」 東京工芸大学工学部紀要、26、
64-75。
- Rosenberg, M. 1965 『Society and the adolescent self-image. Princeton Univ. Press.』
- 坂部弘之 2002 「ストレス研究の歴史的概観」 労働調査会
- 坂本昇一 1993 「登校拒否のサインと心の居場所」 小学館
- 貞木隆志・榎野 潤・岡田弘司 1992 「家族機能と精神的健康ーOlsonのFACESIIIを用いての実証的検討ー」
心理臨床学研究、10、2、74-79。
- 下坂幸三・飯田 眞（編） 1993 「家族療法ケース研究5 うつ病」 金剛出版
- 住田正樹 2003 「子どもたちの「居場所」と対人世界の現在」 住田正樹・南 博文（編） 九州大学出版会
Pp.3-17。
- 鐘 幹八郎 1990 「アイデンティティの心理学」 講談社現代新書
- 鐘 幹八郎・宮下一博・岡本祐子（共編） 1995 「アイデンティティ研究の展望II」 ナカニシヤ出版
- 鐘 幹八郎・宮下一博・岡本祐子（共編） 1995 「アイデンティティ研究の展望III」 ナカニシヤ出版
- 鐘 幹八郎・宮下一博・岡本祐子（共編） 1997 「アイデンティティ研究の展望IV」 ナカニシヤ出版
- 田中麻貴・田蔦誠一 2004 「中学校における居場所に関する研究」 九州大学心理研究、5、219-228
- 谷 冬彦 2004 「さまよえる青少年の心ー発達臨床心理学的考察ー」 谷 冬彦・宮下一博（編著） 北大路
書房
- 鳥山敏子 1997 「居場所のない子どもたちーアダルト・チルドレンの魂にふれるー」 岩波書店
- 上野ひろ美 1992 「「居場所」（身体）と「関わり」（対話）ー共同感情の組み換えー」 現代教育科学、10、28
-30。
- 宇都宮 博 2004 「さまよえる青少年の心ー発達臨床心理学的考察ー」 谷 冬彦・宮下一博（編著） 北大
路書房 Pp80。
- 渡部 淳 2000 「学校の居心地世界と日本ー世界のスクールライフに見るやわらかな学校文化ー」 学事出版

山口昌澄 2006 「よくわかる青年心理学」 白井利明（編） ミネルヴァ書房 Pp.142-143。

山田直美 2002 「子供を中心にみた住空間の計画に関する研究 その3-家族のコンタクトと子供の居場所の関係について-」 日本建築学会中国支部研究報告集、**25**、757-760。